

2022 年度 短期海外研修報告書

@マレーシア工科大学

目次

- p.02 異文化交流研修によせて
- p.03 参加者プロフィール
- p.06 シラバス
- p.08 Program Calendar
- p.10 マレーシアと UTM の基本情報
- p.19 UTM キャンパス紹介
- p.22 クアラルンプール研修報告
- p.28 マラッカ歴史視察報告
- p.32 ジョホール研修報告
- p.39 ホームステイ報告
- p.42 個人エッセイ
- p.92 次回研修参加者のための Q&A
- p.94 UTM バディ紹介
- p.99 編集後記



HITOTSUBASHI UNIVERSITY

異文化交流研修（春季・マレーシア工科大学）によせて

国際教育交流センター 講師 塚田英恵

2022年度の本研修は、コロナ禍の2年間の中断期間を経て4度目の渡航型研修として再開した記念すべき研修でした。そして、今年度からは、持続可能な経済・社会の発展を学ぶという研修の主幹を保ちつつ、渡航国をマレーシア一国に絞ったことで、クアラルンプール、マラッカ、ジョホールバルの三都市で、マレーシアのダイナミックで多様な社会と文化をじっくりと体験しながら、3週間を通してマレーシアの人々との交流を深めることができる研修となりました。

フィールド・トリップ、講義、グループ・プロジェクトと、盛りだくさんの研修でしたが、参加者16名にとって、現地学生のバディさんたちとの交流は、特に大きな意味を持っていたようです。バディの皆さんは、毎晩遅くまでその日の振り返りや翌日の打ち合わせを行い、日中はその疲れも見せずに参加者たちのお世話をし、そして仲間として一緒に語り、笑い、思い出深い時を共にして下さいました。こうした真摯で温かいマレーシアの人々に支えられて、学生たちは様々なことを学び、考え、感じて成長を遂げることができました。彼らがこうした人々への感謝の気持ちを忘れず、謙虚に、かつ大きな理想と夢を持って、世界を明るい未来に導いてくれることを期待しています。

私にとっても、本研修は初めて担当させていただいた海外研修で、企画運営を通して数多くの方々にお世話になりました。感謝しきれないほど親切・誠実にホストを務めてくださったマレーシア工科大学の皆様、コロナ禍の水際対策が残る中、旅行手配にご尽力下さったUTSの上野様をはじめ、本研修を支えて下さった皆様に心よりお礼申し上げます。

全学共通教育センター 教授 太田 浩

「国境をまたぐ能力」を身につけ、「アウェーで実力を発揮できる自信」を獲得することを標榜する本学の異文化交流研修は、グローバル市民としての“第一歩”を踏み出すプログラムと言える。

コロナ禍明けの最初の研修ということで、今回はこれまでになく多様な学生が強い好奇心を持って参加したように思う。大学での事前授業からマレーシアでの実地研修までプログラム全体を通して、参加学生が積極的に取り組んでいた姿が印象に残っている。研修を通して経験したこと、学んだことを本報告書の作成を通して内省化することにより、一人ひとりが異文化間を跨ぐ能力、スキル、態度の礎を築くとともに、次なるステップを自覚したに違いない。本報告書の完成が、研修の「完了」を意味するだけでなく、これからさらに世界で学び、グローバルに活躍するための「始まり」であることを願わずにはいられない。加えて、本報告書が次に続く学生の一助となることを切に期待したい。

参加者プロフィール

3週間、マレーシアで日々の行動を共にした、一橋生同士による他己紹介です！

2022年度は、1年生3名、2年生6名、3年生2名、4年生5名の計16名が参加しました。

(男：女=7：9、商：経：法：社=3：4：7：2)

研修中は、学部・学年の垣根を超えてツアーや自由時間を共に楽しみ、日常生活や授業中で困ったことがあれば、お互いに助け合いました。



Anri, Y. (経 1)

タピオカを見かけるたびに、買わずにはいられないキュート・ガール。毎朝、爆音の目覚ましを10分に一回セットするも、集合時間の15分前に起きるといふ、非常に良い睡眠の質の持ち主である。また、現地で買った足ツボマットをベッドの横に設置しているため、気づかずに踏んでしまったルームメイト（筆者）も本人も定期的に被害を受けていた。



Mahiro, H. (経 1)

気さくに色々な人と仲良くなれるタイプ。現地では多くのバディと話し、中でも同室のバディとは恋バナなどで毎晩盛り上がっていた。数名のバディとは、留学後2ヶ月以上もの間SNS等を使って交流を続けていたといふから驚愕レベルのコミュ強である。近いうちにマレーシアへ渡航しバディと再会する計画を立てているらしく、行動力が人並みではない。



Masaki, N. (経 1)

国を問わず愛される、気遣い上手なバドミントン GUY。研修中、自由時間に UTM の体育館でバディや参加者とバドミントンの試合をした際には、その上手さにみんなが彼に敬服した。英語も上手でハイスペックな彼だが、地名入り T シャツを集めがちという面白い一面も併せ持つ。



Ayano, S. (法 2)

一見大人しそうに見えるものの、実は明るく面白い！UTM 寮のコイン・ランドリー前にいた、寝転がっている猫を見て「命を感じる」と癒されていたものの、起き上がった猫に威嚇されていました。表情豊かで、人の話を聞く際は、その豊かな表情つきで相槌を打ってくれる素敵な方です。滞在中いつも笑顔を届けてくれた天使！



Hiroaki, T. (商 2)

本研修のサブ・リーダー。持ち前のリーダーシップを発揮して、マレーシア研修の様々な場面で積極的に活動していた。バディとの連絡や、参加者同士での企画の取りまとめなど、2年生とは思えない活躍ぶり。現地ではランブータンを気に入ったよう。



Jun, S. (社 2)

とにかくセンスのいい男、通称スガジュン。自由行動で姿を消したと思いきや集合場所に現地で買ったサングラスと柄シャツを着こなし、皆をわかせた。とにかく猫と仲が良く、UTMに住み着く猫はみんな彼に夢中であった。将来はダンディなおじさまになること間違いなし。



Karin, S. (法 2)

2年生とは思えないほどしっかりしている、イギリス英語愛好家。旅上級者で、刺激でいっぱいマレーシアを誰よりも楽しんでた。辛い食べ物にもかなり強く、唐辛子や香辛料がふんだんに使われた、マレーシアのスパイシー・フードに果敢に挑戦していた。バディに推しをつくりがち。



Mizuki, K. (法 2)

普段はとても冷静で大人しいが、一度話せば彼の博識さに誰もが驚くだろう。初海外とは思えないほど現地にすんなりと馴染んでいた。写真部に所属しているだけあって、研修中は自身の一眼レフを常に持ち歩いており、マレーシアの風景を撮影する姿が様になっていた。



Yu, I. (法 2)

ユーモアとノリの良さが魅力のナイスガイ。プレゼンテーションでは持ち前の要領の良さで1位に輝き、自由時間には現地調達のボールを抱えてバスケットコートへ。引くほど部屋を散らかすがたまにきずですが、文武両道ハイスペックな彼の未来は明るいこと間違いなし。



Moeka, Y. (法 3)

持ち前の笑顔と面白さで場を盛り上げてくれた萌花さん。親しみやすい人柄から、バディにとっても後輩にとっても気軽に話しかけにいける素敵な先輩でした！研修中はマレーシアで使われている言葉を積極的に集めながら、日本語のスラングをバディに教え、“Moeka Sensei”と言われるまでに。学生間の言語(スラング)交換の場を作った、第一人者でした！



Shichen, Z. (商 3)

タスクをテキパキとこなすサバサバ系女子。マレーシアでの滞在時間が長くなるほど増える、日本語に混ざる英単語はなんとも癖になる。中国語も話せるため、バディと本当に話したいこと（主に恋バナ）は中国語を使っていた。名前が英語では「Shichen」、日本語では「ししん」だが、バディの発音を真似してこの度「しーちえん」というあだ名が誕生！！



Kurumi, N. (商 4)

とても頼れるみんなのお姉さんの存在！しっかり者で、とっても優しく、生活面や言語面で沢山助けられた。現地の方々にもいつも率先して話しかける積極性の持ち主でもある。最終日のプレゼンテーションでかっこよく英語を話していたのが記憶に新しい。帰りのシンガポールの空港で、筆者と一緒に管理人に交渉したのも良い思い出。



Momono, K. (社 4)

いつも穏やかで、爽やかな青のワンピースが世界一似合うお姉さま。旅の最後にみんなで観た、素敵すぎる思い出 movie を作ってくれたメンバーの一人。流暢な英語でしっかりと自分の意見を伝えられる大人っぽさに惚れたファンは多いはず。英語のときに少し低い声になってカッコ良さが増すのも推しポイント。



Ruri, H. (法 4)

4年生のお姉さんの一人。とっても優しく、常に癒しを与えてくださる癒し系お姉さんです！辛いもの耐性があり、みんながヒーヒー言いながら食べているものも涼しげな顔で召し上がっていたのが印象的です。会話中不意にこぼすワードのセンスがかなり秀逸で、個人的にツボでした。



Ryoji, M. (経 4)

本研修の愛されムードメーカー。バディからも“Ryoji”の愛称で親しまれていた。3週間の研修におおよそ2泊3日用のスーツケースで来たり、マラッカのホテルに着いた途端1人でランニングに出かけたりなど、そのエピソードには事欠かない。気になることがあれば、(何故か)まだ在学している本人に聞いてみよう。



Ryo, S. (法 4)

落ち着いていてしっかりしている4年生！4年生として、そして研修のリーダーとしてみんなをまとめてくれました。大人数の中で積極的に発言するタイプではなく、後ろで見守っているタイプ。それでも安心感と頼り甲斐がありました。

Course Information

【開講学期・曜日・時限】

2022年 秋冬学期

水曜日 4時限、必要に応じて5時限まで

【教員】

塚田英恵 太田浩

【コースの目的と概要】

秋・冬学期中の事前授業（オリエンテーションを含む）を経て、春季休業期間中に3週間（2月中旬～3月上旬）、マレーシアにおいてフィールド・ワーク型プログラムに参加し、グローバル社会におけるコミュニケーション能力を習得し、海外で実力を発揮できる自信を育む研修です。研修期間の3週間を通してマレーシア工科大学の現地学生との交流を継続することで異文化理解を深めながら、最初の1週間は、クアラルンプールにおいて企業訪問を中心としたアジアでのグローバル・ビジネスについての考察を行います。その後の2週間は、ジョホールバルにおいて講義とフィールド・ワークを行います。

【成績評価】

- ・ 渡航前授業への参加（グループワークと発表を含む） 30%（欠席は妥当な理由がある場合のみ2回までとし、3回以上欠席したものはFとします。10分以上の遅刻が2回あった場合には、欠席1回分とみなします。）
- ・ 研修先でのパフォーマンス 40%
- ・ 研修レポートと報告書の作成 30%

成績評価基準

A+	A	B	C	F
100+	90-100	80-89	70-79	0-69

【課題】

1. 渡航前授業の課題（グループ発表、報告書ドラフト提出を含む）
2. 研修レポート：研修後、研修を通しての自分にとって一番大切な学びや成長にまつわるテーマやトピックを決め、それに関する内省的考察に研修中の具体的な経験を交えたエッセイにまとめること。
3. 報告書作成

【授業計画】

(2022 年)

10/12 渡航前授業 1：参加者自己紹介、研修概要、旅行者による渡航手続き

10/26 渡航前授業 2：プロジェクト準備（報告書作成準備）

11/9 渡航前授業 3：マレーシアの文化と社会【ゲスト講師：上智大学教授 梅宮直樹】

11/16 渡航前授業 4：文化とコミュニケーション

12/7 渡航前授業 5：マレーシアについてのグループ・プロジェクト発表

(2023 年)

1/25 渡航前授業 6：ゲストスピーカー（マレーシアからの留学生）

2/15 渡航前授業 7：最終確認と打ち合わせ

2/19～3/11 異文化交流研修期間（3 週間）（研修期間中のスケジュールは別頁参照）

3/22 プログラムの振り返り会

4/26 留学フェアでのプロモーション

4 月～7 月 報告書作成

Program Calendar

Date	Programs
Week 1: Kuala Lumpur – Malacca City	
19/2/23, Sun	Arrival @Kuala Lumpur International Airport (KLIA) Airport pick-up by UTM buddies Check in Hotel Ancasa Kuala Lumpur
20/2/23, Mon	AM: Tour 1 UTM Kuala Lumpur campus/ Malaysia-Japan International Institute of Technology PM: Tour 2 KL Central Walking Trail
21/2/23, Tue	AM: Tour 3 Energy Commission Diamond Building (Putrajaya) PM: Free and Easy (own transport)
22/2/23, Wed	Free and Easy
23/2/23, Thur	Noon: Check out/ Departure to Cara Hulu Hotel Melaka
24/2/23, Fri	Free and Easy
25/2/23, Sat	Noon: Check out/ Departure to UTM Johor & Hotel check-in
Week 2: UTM – Johor	
26/2/23, Sun	AM: Course Briefing & Ice-breaking & Group Bonding PM: Tour4 UTM Green Campus Tour (Eco-park: Aquaponics/ Solar Composter/ Urban Farm)
27/2/23, Mon	Tour5 Cultural Village Tour6 Johor Bahru City Tour
28/2/23, Tue	AM: Lecture 1 Glossary on Low Carbon City & Sustainable Development Goal (SDGs) Lecture 2 Competent Writing & Presentation Skills PM: Team Project Discussion
1/3/23, Wed	AM: Lecture 3 Low Carbon City Development PM: Team Project Discussion
2/3/23, Thur	AM: Lecture 4 Sustainable Consumption and Production (SCP) PM: Tour 7 Yakult Virtual Tour Tour 8 Iskandar Regional Development Authority (IRDA) Tour 9 Kota Iskandar & Forest City Green Township
3/3/23, Fri	[RESORT STAY] Kukup Fish Village & BBQ Cultural Night
4/3/23, Sat	Noon: Check-out and return to UTM

Date	Programs
Week 3: UTM – Johor	
5/3/23, Sun	Free & Easy
6/3/23, Mon	AM: Lecture 5 Empowering Green Action by Youth (Including 15 mins Presentation by each University's representative to present the green initiatives in their home campus) PM: Team Project Discussion
7/3/23, Tue	AM: Team Project Discussion PM: Tour 10 Biocon Malaysia
8/3/23, Wed	Team Project Discussion
9/3/23, Thur	AM: [EVALUATION] Group Presentation PM: Closing Ceremony & Awards Farewell Dinner & Gift Exchange
10/3/23, Fri	Free and Easy
11/3/23, Sat	Hotel check-out, Departure to Airport (Changi/ Singapore)

マレーシアの歴史

文責：石崎侑・河口桃乃・嶋井涼羽・本多留梨

歴史への理解は、異文化理解の第一歩だ。歴史とは、その国が歩んできた道のりであり、国民のアイデンティティの根幹をなすものである。本報告書では、近世以降のマレーシアの歴史でも特に重要な「占領」と「民族」を軸に調査を行った。島国の日本にはやや馴染みの薄いテーマかもしれないが、それ故に私たちは深く理解しなければならない。本報告書で得られた知識が、マレーシアでの異文化交流に少しでも役立てば幸いである。

マレーシアと占領

日本占領までのマレーシアの歴史は、他国による「占領」と深く結びついている。明と西方世界の間位置しその両者に対し中継貿易をすることで栄えたマレーシアであったが、大航海時代の幕開けとともに欧州世界による占領の歴史が始まる。特にイギリスによる植民地支配はマレーシアを大きく変化させた。イギリスのもとマレーシアは錫、ゴムのプランテーションを発達させ有数の産出国となったが、その際に労働力として大量に中華系の移民が流入し、それ以後に起きたマレー系と中華系の民族対立の原因がつけられた。第二次世界大戦下では、資源を求めた日本軍による実質的な占領が行われた。その際日本軍は、植民地解放軍として日本軍を歓迎したマレー系民族等に対しては労働者として使役しつつ柔軟な態度をとる一方、中華系民族は端から共産勢力の抗日分子として大量虐殺の対象とした。占領する側の都合により生じた民族間の分断が、その後の歴史にも大きな影響を与えることとなった。

マレーシアと民族関係

前項でも述べたように、日本占領以降のマレーシアの歴史は「民族」と深く結びついている。1963年のシンガポール州独立と1969年の死傷者635名（政府公表）を出した5月13日事件というマレーシアの歴史にとって外せない史実の原因は、共に国内のマレー系と中華系との民族対立であった。政府はこれらを機に、現在まで続くマレー優遇政策（ブミプトラ政策）を打ち出すこととなる。ただ、1981年に就任したマハティール首相は、ルック・イースト政策という他民族への受容的な方針も同時に打ち出した。これは、1981年に提唱された構想であり、日本と韓国の労働倫理や道徳、経営能力などを学ぶことにより自国の経済社会の発展と産業基盤の確立に寄与させようとする政策である。これにより、マレーシアと日本の架け橋となる人材が増加したとともに、2022年に迎えた40周年を節目に、両国の友好協力関係が促進されている（外務省 2022）。また、近年ではバブル崩壊後の経済停滞に伴い日本もマレーシアから学ぶという姿勢が求められている（熊谷 2014）。我々も渡馬する際には相手国の文化や価値観を広く学ぶべきではないか。

参考文献

- 外務省, 2022, 「マレーシア(Malaysia)基礎データ」, (2022年12月21日取得,
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html#section1>).
- 外務省, 2021, 「シンガポール(Republic of Singapore)基礎データ」, (2022年12月21日取得,
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html>).
- JETRO, 2022, 「外資に関する規制 | マレーシア」, JETRO ホームページ, (2022年12月21日取得, https://www.jetro.go.jp/world/asia/my/invest_02.html).
- 金子芳樹, 2001, 『マレーシアの政治とエスニシティ』 晃洋書房.
- 松永典子, 2014, 「日本占領下の東南アジアにおける日本語教育—マラヤ、北ボルネオを中心に—」, 立教大学アジア地域研究所, (2023年1月11日取得,
https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/caas/qo9edr000000ml88-att/ni_54.pdf).
- 林博史, 1992, 『華僑虐殺—日本軍支配下のマレー半島』 ずずさわ書店.
- 外務省, 2008, 「ASEAN 主要 6 か国における対日世論調査」, (2023年1月11日取得,
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asean/pdfs/yoron08_02.pdf).
- 日本共産党中央委員会, 2015, 「戦後 70 年—日本の戦争を考える マレー半島での華僑虐殺」, しんぶん赤旗, (2023年1月11日取得,
https://www.jcp.or.jp/akahata/aik15/2015-06-08/2015060803_02_0.html).
- 外務省, 2022, 「マレーシアの東方政策 40 周年」, (2022年12月12日取得,
https://www.mofa.go.jp/mofaj/s_sa/sea2/page24_001627.htm).

マレーシアの経済

文責：八木杏理・小山瑞生・多田裕章・吉田萌花

本研修では、マレーシアにて日系企業の訪問を行う。そのため、日系企業によるマレーシア進出の歴史を理解することは極めて重要である。そこで、この章では、マレーシア経済の変遷を概観した上で、特にマレーシアにおける日系企業進出について掘り下げて論じる。

マレーシア経済の変遷

マレーシアの主要産業としてあげられるのは、製造業、農林業及び鉱業である(外務省 2023)。近年は、マレーシア工業開発庁の活躍や、第2次工業化基本計画の制定等がされたことにより、特に製造業が盛んになっており(米田 2000)、製造業に加えてサービス業の発展も著しい。

このように第1次産業から第2,3次産業へとマレーシアが経済発展を進める中、海外企業によるマレーシア進出も進んだ。以下では、マレーシアに進出した海外企業の代表例として日系企業を挙げ、検討を進める。

マレーシアに進出した日系企業

マレーシアに進出した日系企業は、1980年代頃から安い労働力を前提に第二次産業を展開したが、マレーシア経済が発達し、マレーシア人の個人消費力が急激に向上すると、多くの日系企業はサービス業を展開し始めた(鶴子 2023)。ビジネス環境が整い、外資規制が少なく、日本への親しみもあるというメリットがある一方で、近年の物価水準の上昇に伴う人件費の上昇は多くの日系企業にとってマレーシア進出の観点からデメリットである。現在は廃止されているが、経済的に豊かな中国系住民より所得水準の低いマレー系住民を優遇する政策がかつて行われており、その影響は今でも日系企業の採用や企業内でのマレー人への待遇に影響を与えている(HELP YOU 2022)。

以下では具体的に、今回の研修で視察する日系企業である、味の素とヤクルトについて、マレーシア進出に成功した理由を中心に考察する。

1961年にマレーシアに進出した味の素がマレーシア内で事業を拡大できた理由は、現地人の味覚に合わせた新商品の開発や多民族社会に合わせた人事の工夫である(河野 1980)。また、ヤクルトは、独自資本100%での進出を狙い、2003年の進出まで時期を待ったためにライバル企業にリードを取られたが(佐藤 2015)、乳酸菌飲料市場でシェア2位を維持できている。なぜなら、従業員を定着させる工夫をしたり、マレー系に人気のあるサッカーチームのスポンサーを始めたりしたからだ(Resorz 2023)。

マレーシア経済が発展していく中で日系企業を含む様々な海外企業がマレーシアに注目し、進出してきた。マレーシア進出を果たした企業は、味の素やヤクルトの例が示すように、

現地に合わせて新商品開発を行うことで事業を拡大し続けている。

参考文献

- 外務省, 2023, 「マレーシア基礎データ」, (2023年2月3日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>).
- 米田公丸, 2020, 「マレーシアの製造業について」『アジア・アフリカ文化研究所研究年報』第35巻, pp.9-23.
- 鶴子幸久, 2023, 「日本企業の進出が相次ぐマレーシアの実情」, マレーシア IT パートナーズ, (2023年1月9日取得, <https://malaysia-it.com.my/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E4%BC%81%E6%A5%AD%E3%81%AE%E9%80%B2%E5%87%BA%E3%81%8C%E7%9B%B8%E6%AC%A1%E3%81%90%E3%83%9E%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%81%AE%E5%AE%9F%E6%83%85/>).
- HELP YOU, 2022, 「【マレーシア進出成功のポイント】 商習慣や文化などの現地情報を押さえよう!」, HELP YOU ホームページ, (2023年1月9日取得, https://help-you.me/blog/oversea-marketing_malaysia).
- 佐藤翔, 2015, 「なぜ日本の製品が新興国市場の模倣品に勝てないのか」『商大ビジネスレビュー』第4巻, 第3号, pp.75-86.
- Resorz, 2022, 「世界マーケティング人口 24 億人! ヤクルトが海外進出で実践した 3 つのグローバル戦略とは?」, Digima〜出島〜ホームページ, (2023年2月1日取得, <https://www.Digima-japan.com/knowhow/world/17883.php>).
- 河野豊弘, 1980, 「アジアにおける日本の多国籍企業(その2)-マレーシアにおけるケース」『学習院大学経済論集』第17巻, 2号, (2023年2月1日取得, https://www.gakushuin.ac.jp/univ/eco/gakkai/pdf_files/keizai_ronsyuu/contents/1702/1702-42kouno.pdf).

マレーシアの環境

文責：長野諒生・張似晨・鍋倉くるみ・松田稜路

本研修では、主にマレーシアで行われている SDGs の取り組みを学ぶ。そのため、本研修で渡馬するにあたり、マレーシアの環境問題を理解することは非常に重要である。今回は、都市部と自然地域の二つの視点からマレーシアの環境問題の全容の把握を試みる。マレーシアの環境問題について知ることは、本研修に参加する私たちにどのような示唆を与えるのだろうか。

都市部の環境問題とその対策

1. 産業廃棄物による水質汚濁

マレーシアの河川における水質汚濁の主な原因は、かつては伝統的な産業活動（スズ採掘、天然ゴム、パーム油の大量生産）によるものであったが、近年では急速な工業化に伴った大量の工場排水によるものである（高多 2008）。この問題を受けて、マレーシアでは日本よりも基準の高い工場排水規制がとられている。例えば銅やマンガンでは日本よりも 5 倍以上の厳しい基準値が設定されており、ニッケルやズズは日本にはない項目についても規制がある。また、全国 5290 ヶ所の工場を対象に立入検査の実施がされている（地球・人間環境フォーラム 2000）。

2. 都市化に伴う大気汚染

マレーシアにおける大気汚染の主な原因は、1960 年代以降の急速な経済発展により、自動車や工場から有害な物質が大量に排出されたことである。また、大規模な森林火災が原因で頻発する「ヘイズ」という大気汚染問題もある。「ヘイズ」は森林火災の発生源がインドネシアのスマトラ島であることが多く、国をまたぐ環境問題であるがゆえに解決が難航している。大気汚染問題に対しては経済面から対策が行われている（李 2003）。例えば、5 年ごとに経済社会政策の指針となるマレーシア計画が策定され、政策の柱として大気汚染・河川水質の改善・廃棄物の適正な処理など、環境政策の質を高める方向性が示されている（国土交通省国土政策局 2017）。

自然地域における森林破壊とその対策

マレーシアは国土面積の約 53% が森林であり、そこで多くの環境破壊が起きている。国際貿易投資研究所(2008)によると、マレーシアはそうして破壊が進んだ森林に対して、再生のために以下の 3 つの対策を行ってきた。2004 年に「持続可能なパーム油のための円卓会議 (RSPO)」がクアラルンプールに設立。2007 年に「ハート・オブ・ボルネオ宣言」が採択。2009 年には、行政保護下の区画について設定森林区画は第一種森林保護区として再区

分され、伐採や土地転用が禁止された。また、それ以外の場所についても、森林局は一度伐採した森林の伐採権の更新時に認証審査を義務化した。森林破壊には、多様なステークホルダーが関わっている。特に、日本は木材輸入大国であり、無関心ではいられない。

参考文献

高多理吉, 2008, 「マレーシア・パーム油産業の発展と現代的課題」, 国際貿易投資研究所, (2023年2月12日取得, <https://www.iti.or.jp/kikan74/74takata.pdf>).

地球・人間環境フォーラム, 2000, 「日系企業の海外活動に当たっての環境対策：「平成11年度日系企業の海外活動に係る環境配慮動向調査」報告書 マレーシア編」, 環境省, pp.23-30.

国土交通省国土政策局, 2017, 「マレーシアの国土政策の概要」, 国土交通省ホームページ, (2023年2月3日取得, <https://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/international/spw/general/malaysia/index.html>).

李継堯, 2003, 「マレーシアの経済発展と環境問題」, 高崎経済大学地域政策学会, (2023年2月3日取得, http://www1.tcue.ac.jp/home1/c-gakkai/img_kiyou/ronbun/ronbun5-4/lee.pdf).

WWF ジャパン, 2020, 「RSPO (持続可能なパーム油のための円卓会議) 認証について」, WWF ジャパンホームページ, (2023年2月1日取得, <https://www.wwf.or.jp/activities/basicinfo/3520.html>).

環境保全の独立ニュース局, 2014, 「マレーシア領ボルネオで熱帯雨林の80%が伐採」, 環境保全の独立ニュース局ホームページ, (2023年2月10日取得, <https://jp.mongabay.com/2014/02/%E3%83%9E%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E9%A0%98%E3%83%9C%E3%83%AB%E3%83%8D%E3%82%AA%E3%81%A7%E7%86%B1%E5%B8%AF%E9%9B%A8%E6%9E%97%E3%81%A80%E3%81%8C%E4%BC%90%E6%8E%A1/>).

マレーシアの国民

文責：堀田茉陽・櫻井彩乃・櫻井かりん・菅村潤

本稿では、マレーシアの国民を取り巻く社会について生活・宗教・教育・国民性の観点から記述し、日本に住む私たちが彼らと接する上での姿勢のあり方について考察する。

マレーシアと生活

マレーシアの生活について、経済的な観点からは、近年の経済成長に伴い農林業から製造業、サービス業へと産業構造は大きく変化している。また、各国の平和度を表す世界平和指数である Global Peace Index (Institute for Economics and Peace 2022) では、マレーシアはアジア地域においてシンガポール、日本に次いで第3位であり、治安は安定している。このように、産業構造や治安に関しては日本と近い一方、依然として物価は日本よりは低く、ビッグマック指数 (Institute for Economics and Peace 2022) では、日本が 390 円であるのに対し、マレーシアは 338 円であった。

マレーシアと宗教

多宗教国家であるマレーシアでは、連邦の宗教であるイスラム教徒が 6 割以上を占めるが、他にも仏教やキリスト教、ヒンドゥー教など様々な宗教が信仰されている(外務省 2022)。文化庁 (2005) によると、マレー系の多くがムスリムであり、仏教徒には中国系が、ヒンドゥー教徒にはインド系が多い。歴史的にイスラム教を基盤とするが、都市部の古い地区に中国系寺院やヒンドゥー教寺院が数多くあることから、非イスラムの宗教が移民集団によって広められた歴史も窺える。

マレーシアと教育

マレーシアの教育には、マレー系を優遇するブミプトラ政策の影響がよく現れている。例えば『東南アジアを知るための 50 章』(今井 2014) によれば、国公立の学校の教授言語は原則としてマレー語である。しかし多民族国家であるため、マレー語以外の言語が教授言語の学校も存在する。小学校には華語(北京語)とタミル語で教える公立学校があり、中等学校の中にも華語で学ぶことができる私立学校がある。高等教育においては、2002 年に国立大学におけるマレー系学生の入学枠を確保するクォータ制が廃止されたもののいまだマレー系の学生の優位が続いている。

マレーシアと国民性

マレーシアの国民性の 1 つに「共生」がある。例えばマレーシアでは、農林水産省(2017)によると、イスラム教の規則に則ったハラールフードと、当宗教で食が禁じられている豚肉を

用いたバクテーなどの中華系料理が併存する。各民族の宗教・慣習によって異なるが、その寛容性から、彼らの食に対する意識は文化の違いを認めながら共存していると言えよう。

結論

以上のように、マレーシアでは、異なる宗教・文化を尊重する面が確認できる一方、教育面ではマレー系の優遇が続いている。経済成長を背景に当国と日本の国民の生活には類似点も認められるが、民族・宗教的要素の強い食生活や国内制度などの相違点も多い。私たちには日本と異なる彼らの宗教や文化を尊重し理解しようとする姿勢が求められる。

参考文献

外務省, 2022, 「マレーシア基礎データ」, (2023年2月11日取得,

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>).

文化庁, 2005, 「海外の宗教事情に関する調査報告書」, pp.167-169, (2023年2月10日取得,

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/shumu_kaigai/pdf/h17kaigai.pdf).

今井昭夫・東京外国語大学東南アジア課程, 2014, 『東南アジアを知るための50章(初版)』 赤石書店, pp.415-420.

戸部勲, 2019, 『「アジアの時代」を生き抜くためのマレーシア留学ガイド』 イカロス出版.

Institute for Economics and Peace, 2022, 「Global Peace Index」, (2023年1月13日取得, <https://www.economicsandpeace.org/reports/>).

在マレーシア日本国大使館, 2014, 「マレーシア生活安全情報 8. 衛生状況」, (2023年2月13日取得, <https://www.my.emb-japan.go.jp/Japanese/guide2014/guide2014-8.html>).

農林水産省, 2017, 「5. 食市場の概況」, (2023年2月11日取得,

https://www.maff.go.jp/j/shokusan/export/e_kikaku/28/attach/pdf/170331-11.pdf).

JTB マレーシア支店, 2022, 「マレーシア・祝日 2022年版」, (2023年2月1日取得,

https://www.jtb.co.jp/kaigai_guide/report/MY/2021/10/263_943829_1633659987.html).

UTM 基本情報

文責：嶋井涼羽

マレーシア工科大学(Universiti Teknologi Malaysia、以下 UTM) は、マレーシアで最も古い理工系の国立大学である。学部課程では、7つの学部・学科にまたがる 50 以上のプログラムが提供されており、工学部や理学部とって理系の学部の他にも、社会科学・人文学部、アマゾン・ハシム国際ビジネススクールなど、文系色の強い学部も存在する。

マレーシア工科大学の特徴は何といても、そのキャンパスの広さである。メインキャンパスはマレー半島南部のジョホールバル州にあり、分校が首都のクアラルンプールにあるのだが、ジョホールバルの本校は特に、校内に学部ごとの校舎や図書館を始め、スタジアムやプール、乗馬施設やラグビー場など日本では想像できない程に設備が充実していた。

学生数は 26,507 人で、マレーシアにおける工学系人材の 3分の2 を輩出している研究重点大学であり、2022 年時点で 5,389 人の留学生が在籍している、非常に国際色豊かな大学でもある(UTM 2023)。我々のバディ (UTM の学生) のほとんどは中国系であったが、学内全体の構成としては、マレー系が多数派である。

2024 年版の Quacquarelli Symonds (QS)世界大学ランキングにおいて、UTM はアジア 39 位、世界で 188 位であった。また、2023 年の Times Higher Education (THE) の分野別ランキングにおいては、人文、教育、コンピュータ科学、ビジネス・経済の 4 分野がマレーシア国内のトップ 3 に入っている。さらに、同年に行われた、持続可能な開発目標 (SDGs) の 17 の目標別に大学のインパクトを測る THE ランキングでは、UTM は「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」という目標において、世界の 812 大学のうち 1 位であった。(UTM 2023)。UTM は日本語教育に熱心な大学としても知られており、日本企業に就職する学生も多いとも言われている。

参考文献

UNIVERSITI TEKNOLOGI MALAYSIA, 2023, 「Facts and Figures」, UTM ホームページ, (2023 年 7 月 12 日取得, <https://www.utm.my/about/facts-and-figures/>).

UNIVERSITI TEKNOLOGI MALAYSIA, 2023, 「University Ranking」, UTM ホームページ, (2023 年 7 月 12 日取得, <https://www.utm.my/about/achievements/>).

UTM キャンパス紹介

文責：張似晨

クアラルンプール（KL）キャンパス

KL の市中に位置し、Malaysia-Japan International Institute of Technology (MJIIT) の学生、International Business Student などが所属している。面積は 38 ヘクタールと一橋大学の国立キャンパスとほとんど同じである。

日本から来た教授が運営している藻の研究室、日本文化交流ルームなど多くのところで日本との交友が感じられた。また、キャンパス内には、東南アジアで広いシェアを占めるシェアサイクルの Beam が何箇所か設置されていた。キャンパスから市街地に行く際に便利そうである。そして、教室内は綺麗であり、言うまでもないがエアコンが非常に寒い。防寒上着を持っていなければ授業に集中するのは難しそうである。



キャンパス内に設定されている

Beam



MJIIT 外観



藻の研究



日本文化交流ルーム

ジョホールバル（JB）キャンパス

1. 概要

市街から離れた所に位置し、UTM のほとんどの学生は JB キャンパスに所属している。面積は約 1200 ヘクタールで、一橋大学の国立キャンパスの 4 倍あり、建物から建物まで移動する際はバスが欠かせない。また、キャンパスから市街地へ出る際に、バスまたはタクシーで 15 分ほどかかる。全員で移動する際には UTM のバスを無料で利用できるが、それ以外の時はタクシー各班で手配する必要があるのでタクシー代がかなりかかる。

キャンパス内は、非常に自然豊かであり、南国を感じさせる植物や鳥が多くいる。また、猿も教室の廊下やキャンパスの内で頻繁に出没する。関わると危ないので、見たら静かに逃げた方がよい。

さらに、キャンパス内にはナイトマーケットやモスクなどマレーシアらしい要素もある。ナイトマーケットは期間限定で開催され、そこで食事したり、買い物したりすることができる。モスクは、外側から見学ことができ、お祈りの時間には、お祈りをしている声がよく聞こえてくる。



ナイトマーケット



モスク

2. ホステル

今回の研修で滞在したのは、**Scholar's Inn** というホステルであり、4人部屋であった。一橋大学の学生だけの部屋や、立命館大学の学生やバディと同居のところもあった。キッチンには、冷蔵庫とポットはあるが、それ以外は何もないので料理はできない。また、飲酒やドリアンをホステル内で食べると 200RM の罰金が課せられる。週に 1 回ルームサービスで部屋の掃除や、シーツの取り替えや、トイレット・ペーパー、ティッシュの補充をしてくれる。また、何かあれば 1 階のフロントで対応してくれる。例えば、郵便物の預かりや、殺虫剤なども貸してくれる。

ホステルから徒歩 2 分ほどのところにランドリーがあり、洗濯と乾燥を合わせて 1 回 30RM ほどでできる。洗濯機はかなり大きいので、3 人ほどでシェアできる。また、近くに体育館（予約制）やバスケットコートなどがあり、授業後に運動することができる。売店に関しては、春休み期間であったため、営業しているところが少なかったが、ホステルのすぐ近くにあるカフェテリアでは、朝食 3RM、夕食 7RM ほどで食べる事ができた。



体育館



外観

参考文献

UNIVERSITI TEKNOLOGI MALAYSIA, 2023, 「UTM Campus」, UTM ホームページ, (2023 年 4 月 8 日取得, <https://www.utm.my/about/utm-campus/>).

Malaysia–Japan International Institute of Technology (MJIT)

文責：菅村潤

クアラルンプール滞在二日目の午前中は、UTM クアラルン・プールキャンパスにあるマレーシア日本国際工科院 (MJIT) を訪問した。

まず、施設内の教室で MJIT について説明を受けたのち、少人数のグループに分かれて、MJIT で学ぶ学生と交流した。MJIT は、マレーシアで日本型の工学教育を行う高等教育機関であり、学生は日本語教育や日本文化についても学べるようになっている。そういった授業やカリキュラムについて、実際に体験している現地の学生から直接話を聞くことができた。グループによっては部活動や課外活動などについても話をし、彼らの学生生活を日本と比較しながら知る良い機会になった。また、施設内に日本文化を体験するために設けられた教室があり、そこでは現地の学生がどのように日本の文化に触れているのかが窺え、大変興味深かった。



次に、藻類バイオマス研究の施設を見学し、研究内容についてのご説明をいただいた。専門的な内容も含まれていたため難しかったが、バディが逐一解説を加えてくれた。マレーシアは一年を通じて気温が安定しており日射量も多いため、微細藻類の研究を行いやすい環境だという。藻類由来のバイオマス燃料は、温室効果ガス排出量の削減や食品利用との競合の回避など多くの利点があり、今後いっそう需要が高まっていくエネルギー資源である。文系専門の一橋大学では見ることのできない研究施設の視察は、参加者にとって非常に新鮮かつ貴重な体験だった。



最後に、キャンパス内のカフェテリアで昼食を食べてキャンパス・ツアーを終えた。メニューはマレーシアでは定番のライスとチキンで、一緒にいた現地学生の一人は学食の味について何故かしきりに酷評していたが、こちらとしてはお世辞抜きにかなり美味しかった。食事中や食事のあと、現地の学生とお互いの学校生活についてフランクに話すことができとても楽しかった。

学生との交流や研究施設の視察など、自分の目と耳で直接体験し学ぶことができ、非常に有意義な時間だった。

Batu Caves

文責：菅村潤

クアラルンプール滞在四日目は、バディが提案してくれた三つの選択肢の中から参加者が各々行きたい場所を選んで観光を楽しんだ。カフェ巡りをした人やバードパークを訪れた人もいたが、筆者を含め七～八割の参加者はバトゥ洞窟を観光した。

バトゥ洞窟はヒンドゥー教の聖地であり、洞窟の内部にヒンドゥー教の寺院がある。洞窟は高くそびえる崖の中にあり、そこには階段を上って行くことができる。階段はカラフルで、その登り口には巨大なヒンドゥー教の神像が立っており、下から見ると崖を背景にして非常に壮観な景色だった。設けられた階段は全部で 272 段もあり、洞窟にたどり着くまでにそれなりの時間と体力を要したが、上りきって上から街を見下ろしたときには大きな達成感が得られた。



洞窟内にはヒンドゥー教の建造物や装飾に加えて天然の鍾乳洞があり、天井に空いた穴から日の光が入ってきて神秘的な印象を受けた。また、寺院では食事の配給を行っており、参加者も少しだけもらうことができた。バディに教えてもらいながら、直接右手を使って食べる伝統的な作法を体験した。

バトゥ洞窟はサルがたくさんいることでも有名であり、洞窟の内部をひと通り見て回ったあとは、サルに物を取られないようによく注意しながら階段を下りて下に戻った。食べ物を持っていると狙われやすく、実際に階段を下っている間に何人か被害を受けていた。サルたちは非常に人間に慣れているため、持ち物に最大限の注意を払ってさえいれば、かなり間近でサルを見ることができ面白かった。



敷地内には食べ物から雑貨にいたるまで様々な屋台が並んでおり、洞窟から下りてきたあとは各自で自由にそれらを楽しんだ。なかでも、インド系の人々の伝統的なアートであるヘナタトゥーと呼ばれる、二週間ほどで消えるボディペイントを施してくれるサービスが参加者には人気だった。

同じく敷地内にあるお店で休憩がてら軽食をとったあと、最後に洞窟の外にあるヒンドゥー教寺院のなかを見て回った。ここにもサルがたくさんいたことが印象的だが、日本の寺院では決して見られない色鮮やかな装飾だらけでとても新鮮だった。



クアラルンプールでの見学

文責：多田裕章

マーケット (Petaling Street Kuala Lumpur)

UTM のクアラルンプール(KL)・キャンパスを見た後、軽く昼食を済ませてホテル近くのマーケットを見に行った。中華系、インド系、マレー系の文化の違いを感じられるマーケットで、マレーシアに来たことを実感できた。街の壁に描かれている落書きがアートになっており、カラフルな通りがとても多かった。日本と比べてフルーツが安かったので、飲んだことのないグアバジュースを購入。思っていた味とは少し違ったが、サッパリしていて美味しかった。手提げがついていて持ち運びに便利だったため、とてもありがたかった。他にも日本では高くても買えないマンゴーもよく見かけた。

また、マーケット付近にあるトイレは有料だった。日本では有料のトイレを見たことがなかったからとても驚いた。50セントコインを投入後、係員からわずかなトイレット・ペーパーをもらって入るというシステムで、日本と比較して、トイレット・ペーパーの量がとても少なく感じた。渡航前授業でホースの水でお尻を洗うというマレーシアのトイレ事情について習っていたが、いざ本物を目の当たりにすると驚きを隠せず、ついつい写真を撮ってしまった。とりあえずトイレ内を見るためだけに50セント払ってトイレに入った。

唯一悲しかったのは、病気で横たわっている子供を見た時だった。バディによると、KLの闇の部分らしい。社会保障を受けられない子供が存在するらしく、日本よりも生々しく貧富の格差を見た瞬間だった。

夜は、ホテル近くのコイン・ランドリーに行った。マーケットの近くだったため、洗濯物が終わるまでの待ち時間で再びマーケットに行った。豆乳の飲み物、“豆浆水”を飲んだ。中国語の発音が難しかったが、とりあえずジェスチャーで注文した。昼とは雰囲気が異なり、お祭りのようにとても賑やかで活気のある通りだった。



Energy Commission Diamond Building (Putrajaya)

プトラジャヤにある巨大なサステイナブル施設（3600 m²）を見学した。施設の周辺には行政機関が集まっており、とても整備されていた。この施設はサステイナブルであること（①化石燃料の使用削減、②水の節約、③サステイナブルな建材、④廃棄物の最小化および廃棄物回避、⑤施設内の人々の健康への配慮、⑥輸送管理システム、⑦建設・解体管理計画）といった7つの項目に配慮して建設された。実際に施設内はとても涼しく、室内の温度を下げるためのクーラーの電気使用量を減らすために建物の壁には水が流れていた。また、太陽光を最大限取り込むために光の屈折率を考慮して設計されており、建物全体がダイヤモンドの形をしていた。屋上にはソーラー・パネルが設置されており、近くでソーラー・パネルを見るために屋上まで行くことができた。施設を建設するのにかかった費用は、646,000,000 リンギット（日本円で大体 19,380,000,000 円）とかなり高額だった。



参考文献

Suruhanjaya Tenaga Energy Commission, 2023, Suruhanjaya Tenaga Energy Commission ホームページ, (2023年4月21日取得, <https://www.st.gov.my/>).

世界遺産マラッカで過ごした3日間

文責：吉田萌花

1日目（2月23日）

塚田先生と Hotel Ancasa にお別れの挨拶をし、およそ4日間滞在したクアラルンプールを出発した。目的地は、クアラルンプールからバスで3時間程度南に移動した先にある、歴史的な街マラッカだ。

Hotel Cara Hulu に到着したのはお昼過ぎの時間だった。クアラルンプールでたくさんの場所を巡った疲れが残っていたため、到着早々お昼寝をした。途中、スピーカーから流れるムスリムのお祈りの歌声に起こされてしまったが、昼寝のおかげでかなり元気になった。ちなみに、お祈りは1日に何回か決まった時間にあるらしく、音に備えるため、バディさんが明日（2月24日）のお祈り time を LINE で報告してくれた。

夕方、ホテルを出て、川のそばにあるお店で夕食をとった。メニューは中華系料理やマレーシア料理、洋食など幅広く、各々好きなものを食べた。足元を猫が頻繁に通るので、驚かずに冷静に食べることに力を注いだ。



川沿いのレストランにて

夕食後、希望者は川を通る船に乗ってマラッカを回った。陽気な音楽と解説してくれるナレーターさんの声、想像以上に速い船のスピードとマラッカの景色を存分に楽しむことができた。



屋形船でマラッカ巡り

2日目 (2月24日)

朝食に、カヤ・トースト（甘いジャムの入ったトースト）などをとった後、マラッカの観光をした。

寺院に入ったり、いくつか街中のお店を巡ったりした中で、特に印象に残ったのは、紙で作られたグッズをたくさん置いてあるお店だった。日本でいうお盆のような日に、ご先祖様が欲しいであろうものを想像し、本物の代わりに模して紙で作られたこれらのグッズを燃やすことで、必要な物を届けるそうだ。食べ物や飲み物だけでなく、懐中電灯、ブランドもののバッグや、スマートフォン、さらには家までもが紙で作られていて、見ていて非常に面白かった。最初にマラッカでこのようなお店を発見したが、後に移動するジョホールなど他の場所にも同じようなお店を発見することができた。



カヤ・トースト
シンガポールが発祥の地であるとのこと。とても美味しい！



紙で作られたブランド物のバッグ、靴、飲み物など。

次に私たちが訪れたのは、ファモサ要塞だった。マラッカ王朝を滅ぼし、1511年に植民地支配を開始した大航海時代のポルトガル人が、オランダの攻撃を防ぐ目的で建設したのが、この要塞だ。周囲には大砲も置かれていて、大航海時代を彷彿させる貴重な建造物だと思った。



ファモサ要塞 外部・内部の写真

ところで、マラッカ巡りをしたこの日は猛暑だったため、アイスを食べた。スイカに穴が開けられたものを丸ごと買って食べている人もいた。

夕食の時間になり、私たちが向かったのは Nyonya Food のお店だった。マレーシアに移住してきた中華系移民と現地のマレー人との間に生まれてきた混血の子孫を総称して、“Baba Nyonya”というらしく、彼らの料理を Nyonya Food と呼ぶそうだ。辛いものが苦手なので一部食べられないものもあったが、辛いものも全て美味しく、料理を存分に楽しむことができた。また、お会計の際に、バディさんにマレー語での数字の言い方（サトゥ (1)、ドゥア (2)、ティガ (3) …）を学び、それ以降の生活で想像以上に役立った。



Nyonya Food

夕食の後は、Night Market に向かって、お土産などを見て回った。非常に賑わっており、お店もたくさんあったので、かなりの時間をここに費やした。バディさんと初めて離れて過ごしたので少し不安に思ったが、何とか慣れて良かった。今までバディさんにたくさん助けられてきたことに改めて気づいた。



Night Market の様子

3 日目 (2 月 25 日)

前日にたくさん歩いたのに加え、部屋に出た虫の対処で疲れは溜まっていたが、朝食に肉骨茶 (Bak Kut Teh) というマレーシアのスープ料理を食べ、力を蓄えた。ジョホール

で新たに合流するバディ、立命館大学の学生と会うことに緊張と楽しみを感じつつ、マラッカを後にした。

おわりに

マラッカで過ごした期間は3日間で、ジョホールやクアラルンプールに比べると短い期間となったが、訪れたところや食べたものが盛り沢山で、日本に帰ってからも非常に印象に残っている。帰国後、長崎県の出島に行った際にも、マラッカの紹介があるとすぐに反応してしまった。マレー半島で産する錫が出島に輸出され、日本の貨幣の原料にもなっていたそうだ。古くから中継地点として栄え、日本とのつながりもあったマラッカの視察を通し、マレーシアの歴史と現在を学ぶことができたのはとても有意義だった。

Johor Bahru での講義って実際どんな感じ？

文責：鍋倉くるみ

UTM の講義ってどれくらい厳しいの？

これから異文化交流研修に参加しようとしている人は、特に英語に苦手意識のある人であれば講義に戦々恐々としながらこれを読んでくれているかもしれない。私自身、生まれも育ちも日本で、英会話は PACE 以来だったので、英語を話すことに自信がないまま参加を決めた。2023 年度以降の講義内容やスタイルが私たちの受けたものとは大きく変わる可能性も大いにあるが、私のパートを読んだら「そんなに恐れなくて大丈夫そう」と思えるはずだ（と信じて書く）。

「スピーキングに自信がないです。」

プログラム中は多くの講義がある。全て英語だが、双方向のコミュニケーションというより聴く時間のほうが長かったので、講義を通して最も伸びるのはリスニングスキルかもしれない。さらに、質疑応答の時間で手を挙げて質問にチャレンジすれば度胸が身につくだろう。英会話に苦手意識を持つ私も何回か質問にチャレンジしたが、ネイティブにとっては違和感がありそうな文章表現になってしまっても「質問にチャレンジした」ということだけで歓迎された上、バディさんがフォローしてくれたので、頑張って質問して良かったと感じている。

Aa

講義内容の概要

2022 年度のプログラムのテーマは Green Development だったため、それに関連した講義が大学の内外で開講された。座学形式のものもあればフィールド・ワーク形式のものもあり、講師は役所の職員さん、教授、バディなど、日によって異なっていた。その中でも私にとって印象的だったのは以下の 2 つの講義である。

- **Forest City 視察**

Forest City とは、ジョホール州の端の人工島で進められたスマートシティ計画の産物で、現在は誰も住んでいないゴーストタウン化した街である。豪華なホテルや病院など、充実した設備が整えられたにもかかわらず、政策転換を受けてターゲット層が離れていき、今でも多くの棟が住人のいないまま残



されている。前ページ右下の写真は私がバスから撮影した Forest City である。これを撮影しているときは「豪華なタワマンだな」と思っていたが、バスがその“豪華なタワマン”の傍に停車し、もぬけの殻になっている内部に足を踏み入れたときの衝撃は忘れられない。「こんなにも広大な敷地と設備が未使用のまま無駄になっているのか」と。政策との協調なしに持続可能な街づくりは成し得ないことを肌で実感できる、とても貴重な経験であった。

- **Tips for Presentation Slide**

この講義は、マレーシアプログラム終盤のグループプレゼンテーションのためにバディから座学形式で受けたものである。何が衝撃的だったかと言うと、バディの皆が持つプレゼンテーション・スキルの高さである。(バディたちは勉強熱心な人が多かったので、「マレーシアの学生が」という一般化は必ずしもできないかもしれない。)



Power Point だけでなく Google Slide や Canva も活発に使い、スライドに埋め込むフリー素材の知識も豊富で、「少なくとも一橋大学ではそこまで凝っているスライドは見たことがないぞ」というクオリティを彼らは当たり前としていた。しかも、ただひたすらに凝っているのではなく、それを観る人の理解を促進するような良い塩梅の工夫になっていた。グローバル人材という言葉は今やそこら中で耳にするが、このようなツールのノウハウも「グローバル人材」を構成する要素なのだと考えさせられた。

まとめ

プログラムは講義形式が多いので、英語に苦手意識を持っている私のような人もそれほど恐れなくて良いであろう。逆に、英語を使って活発なコミュニケーションをしたい人には講義を受けるだけでは物足りないかもしれないが、自分から質問したりバディと頻りに会話したりしてそこは補えると思われる。英語力がどのレベルであれ、講義内容は私たち日本人学生にとって新たな学びに繋がるよう設計されていたので、知的好奇心が旺盛な人ほど楽しめると思う。上記 2 つの講義以外にも興味が惹かれるものは多かったので、ぜひ現地の雰囲気とともに体験してほしい。

Johor 研修最後の砦 : Team Presentation

文責：長野諒生

チーム・プレゼンテーションとは？

マレーシア研修の最大のイベントと言っても過言ではない、チーム・プレゼンテーションについて紹介する。これを読めばチーム・プレゼンテーションがどのようなもので、実際どのように行われるかが良くわかるだろう。今後のマレーシア研修プログラムに参加を検討している皆さんの疑問や漠然とした不安が、本稿を通じて少しでも解消されれば幸いである。

チーム・プレゼンテーションは本研修の最終到達課題として設置され、一橋大学の教授や UTM の教授を前にして行われるとても重要なイベントである。日本の研修参加者と現地のバディがほぼ均等に混ざった計 5~6 人で一つのチームを構成し、そのチームで協力してプレゼンテーション発表を行う。プレゼンテーション発表は教授らによって採点され、得点上位 3 チームには景品や賞状が用意されていた。

グループ・ワークが大事

研修当初は、初対面のバディ達とグループで仲良くやっていけるか不安もあったが、すぐにそれが杞憂であったとわかった。というのも、ジョホールに着いてからの自由行動はグループで動くことが多いため、一緒にご飯を食べに行ったり、観光をしたりする中ですぐに仲は深まるからである。チームワークが鍵を握るチーム・プレゼンテーションなので、こうしたグループ行動の時間が多く取られていたことが非常にありがたかった。



トピックは SDGs に関係している



さてプレゼンテーションの内容に移ろうと思う。各グループには予め別々の SDGs に関連したトピックが用意されており、それについて発表することが求められた。

後にも紹介するが、トピックは **composting** や **aquaponics** といったあまり聞きなじみのないものが多かった。これらはすべてジョホールでの教授らによる講義と絡んでおり、その分講義よりも深い内容の発表が求められ、最終的にどのグループも非常にクオリティの高いプレゼンテーションをしていたことを覚えている。

グループ・ディスカッションの時間

ジョホールではプレゼンテーションに向けた準備という位置づけで、グループ・ディスカッションの時間が2時間×5回、計10時間設けられていた。長いように思われるかもしれないが、この10時間で内容決め、リサーチ、スライド作り、原稿作成、プレゼンテーション練習をすべて終わらせなくてはならないので、体感では非常に短く感じた。

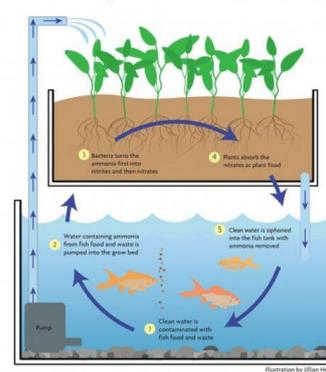
プレゼンテーション時に原稿を見ながら発表することはできず、許されたのは小さなメモ程度だったため、プレゼンテーション前日は多くのグループが自主的に集まって発表の練習をしていた。こうしたプレゼンテーション準備は確かに大変であったが、その分良いチーム・プレゼンテーションができたことへの達成感はとても大きく、充実した時間だったと振り返っている。



プレゼンテーショントピックの一例：AQUAPONICS

プレゼンテーショントピックの一例として aquaponics を紹介しよう（筆者のグループが担当しました）。aquaponics は魚と植物を同一システム内で育てる新しい農業形態である。これは魚の排出物をシステム内のバクテリアが植物の栄養素に分解し、植物がそれを養分に成長し、そして植物によって魚の水槽が浄化されるという効率的な循環によって成立している。プレゼンテーションの内容は、aquaponics の仕組みや長所について述べた後、この農業形態がどのようにして食糧安全保障に役立っているのかを説明し、最後に aquaponics の課題と解決策を三つずつ紹介、とざっくり言えばこのような流れとなっている。aquaponics 自体の説明に時間を割けば簡単なのだが、それについては教授によって既に全体で講義がなされている。そのため、プレゼンテーションでは、食糧安全保障という観点からの説明や、aquaponics の課題と解決策、といったより発展的な内容が求められた。内容が高度な分、最終的な完成度は10時間で作ったとは思えないほど素晴らしいものになったと自負している。

THE AQUAPONICS CYCLE



まとめ

チーム・プレゼンテーションは、グループでの連携や十分な準備、プレゼンテーション能力とそれを可能にする英語力といった様々な力が求められるため大変ではあったが、その分国際コミュニケーション能力や英語でのプレゼンテーション能力を養うことができ、

非常に有意義なものであった。そして何より、海外の学生と協力して何かを達成することは貴重であり、皆にとって満足度の高いイベントだったと思う。こうした機会を求める成長意欲の高い皆さんには、ぜひ今後のマレーシア研修に参加されることをおすすめする。

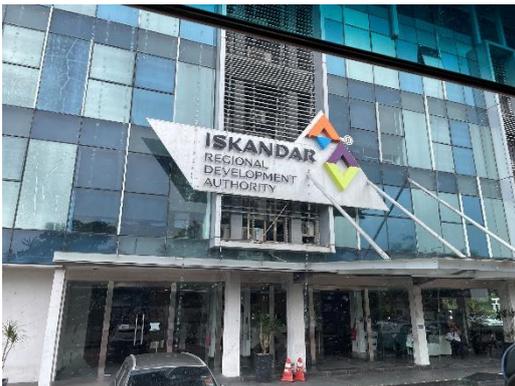
学びはキャンパス外にもアリ

文責：八木杏理

Johor Bahru では UTM キャンパス内での授業だけでなく、フィールド・ワークがいくつか用意されていた。鍋倉さんが講義概要を説明してくれたので、私は詳しいフィールド・ワークの内容について 2 つ紹介したいと思う。

Iskandar Regional Development Authority (IRDA) 訪問

この長い文字列を見て怖気づく人もいるかもしれないが、私もマレーシアに行って初めて存在を知った。この Iskandar Regional Development Authority、略して IRDA はマレーシア連邦政府の機関であり、“Iskandar Malaysia” という地域を持続可能な都市に発展させるというビジョンのもと活動している（具体的に Iskandar Malaysia は、Johor Bahru を含む 5 つの地方自治体で構成されている）。



IRDA に訪問した日は、午前中にキャンパスで講義を受けたあとに全員でバスに乗って施設に向かった。建物に入るときれいな部屋が用意されており、IRDA の職員さんから直接お話をうかがうことができた。講義の中では、IRDA がどのような計画のもとに SDGs 達成を目指しているのか、他国のどのような団体と協力しているのか、更にはどうして Iskandar Malaysia を開発対象として選んだのか、などインターネット上では知ることのできないことを学べた。この研修は理系大学である UTM で学ぶということもあり、全体的に理系要素がかなり強かったが、IRDA は都市開発に強く関わる機関であるので、文系である私にとっても興味深かった。

部屋には温かいお茶と二種類のお菓子が用意されており、どれも美味しく頂いた。余談であるが、キャンパスでも講義室の向かいの部屋に飲み物とお菓子が毎回大量に用意されていて、授業を頑張ったあとのご褒美として最高に嬉しかった。個人的には一橋にも無料お菓子システムを導入したいものだ。



The Malay Cultural Village 訪問

この施設は文字通りマレーシアの文化を一覧することができる場所である。ただ展示を見るのではなく、マレーシアの植物に囲まれながらお話を聞いたり、伝統衣装を着たりなど様々なことを体験できる。お昼時に近づくと、食事としてマレーシアの伝統料理である Roti Canai と Teh Tarik を頂いた。Roti Canai はインド系イスラム教徒にもたらされたナンのような生地で、Teh Tarik は上に泡が乗ったミルクティーである。Teh Tarik の泡は注ぐときにできるものであるが、その泡づくりも体験させていただくことができ、みんなで楽しめた。



伝統舞踊を体験する一同

個人的に一番印象的だったのが、マレーシアの伝統舞踊である。目の前で楽器とダンスを披露してくれたのだが、どちらも普段は見聞きしないような独特な雰囲気醸し出していた。特にダンスは特徴的な手の動きが繰り返されていたので、どうしてこの動きが生まれ、伝統的に継承されてきたのか、その背景となる生活やその他の文化を調べて研究したいという思いに駆り立てられた。

他にも、Batik と呼ばれるマレーシアの伝統的な染物づくりをバディと一緒に体験することができ、思い出付きのお土産を自宅に持ち帰ることができた。スタッフさんの丁寧な説明と多くの体験で、記憶に残る訪問となった。



染物づくりに励む Bay

まとめ

日本の大学に所属していても参加する機会が少ないフィールド・ワークをマレーシアで体験することができたのは、記憶に残る活動となり、非常に有意義だった。上記以外にも様々な授業が用意されていたおかげで、2週間の Johor Bahru 滞在は本当に充実していた。何をすればいいかわからないが、多様な経験を積みたいそのあなたにも、非常におすすめる研修だ。

海の上のホームステイ体験

文責：河口桃乃

研修が始まってから10日以上が経ち、マレーシアでの生活や授業に慣れてきた頃、普段滞在していた学生寮を離れ、1泊2日のホームステイ体験に行った。学生寮からバスで移動した後、ククップ（Kukup）という名前の漁村に到着し、そこからさらに、海の上を船で10分ほど移動すると、水上にある高床式施設に到着した。白を基調とした木造建築の広い施設で、窓から外を見ると大きな海とマングローブが広がっていた。

ステイ先での交流会

施設内には、卓球やボードゲーム、カラオケなど様々なものが置いており、研修生はバディの方々と一緒に目一杯遊ぶことができた。カラオケでは、DJ役として皆を楽しませてくれる人や、歌が特段に上手な人がいたりするなど、授業だけでは気付けない皆の個性が見られた。バディの方々も、マレーシア国内で有名な歌を多く聴かせてくれた。例えば、マレーシアの新年を祝う「泰國的表弟」という曲は、予想以上に陽気で独特な雰囲気のある曲で、一度聴くと頭から離れなかった。バディの方々が多言語に長けており、マレー語、中国語、英語、日本語が飛び交う時間で、非常に面白かった。



ボードゲームを楽しんでいる様子



カラオケの様子

一通りゲームを楽しんだ後は、バディの方々が企画してくれたスパイゲームが開催された。研修生とバディの皆さんの混合のグループで、それぞれが表のゲームで勝利を目指していく中で、裏ではスパイが数人紛れ込んでおり内緒で任務を進めていくというものである。前日にスパイ役を頼まれた私は、ポーカーフェイスが苦手なのでスパイだとバレてしまい、非常に悔しい思いをしたことは記憶に新しい。

カルチュラル・ナイト

夕飯を食べた後は、マレーシアと日本の文化を紹介し合うカルチュラル・ナイト（Cultural Night）という交流会が開催された。参加者は皆自国の伝統衣装を着て参加した。もちろん着るだけでは終わらず、グループごとにランウェイをすることになった。皆の前で歩くのは少し恥ずかしかったものの、それぞれの衣装の紹介から、双方の宗教や文化の理解を深められ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。中華系の伝統的な正装や、イスラム教のヒジャブなど、日本では滅多に見ることができない服装について細かく学べたことが嬉しかった。

一部の研修生は、カルチュラル・ナイトの直前に、みんなの前で文化紹介の発表をすることを任されていたが、少ない準備時間だったのにも関わらず、卒なくこなしており脱帽した。



ランウェイ後、舞台上で写真撮影をしている様子

学びと感謝

ホームステイ体験を経て、主に2つのことを学んだ。1つ目は、「切り替える力」である。バディの方々は、ゲームなどで遊んでいる時やカルチュラル・ナイトでランウェイをしている時、目の前のことに真っ直ぐ向き合い楽しんでくれていた。マレーシア工科大の学生寮で、同じ部屋で生活していたあるバディの方は、毎日深夜まで勉強をしていて疲れているはずなのに、その時の真剣な顔を、ホームステイ中は見せていなかった。このような切り替える力は、私は持っていないと実感し、自分も真似してできるようになりたいと感じた。2つ目は、「言語を『勉強』として捉えない」ということである。日本にいるときは、言語学習（特に英語）を「勉強」として捉えがちだが、ホームステイ中にはそのような意識をせずとも自然に学べることがあった。むしろ、勉強の範疇では知り得ないことばかりであった。この先もこの意識を大切にしながら日常的に英語を使っていきたい。

この先、本研修に参加する方へお伝えしたいことは、「自分から積極的に交流しようと思えばするほど、得られるものが多い」ということである。ホームステイ体験では、自由時間が多いからこそ、どのような行動をするのかということが個々人に任せられるため、

自分の行動の選択が非常に重要であると感じた。参加した暁には、是非主体的に楽しんでほしい。最後に、バディの皆さんにはこのホームステイ体験でも、企画進行、プレゼンテーション、気遣いなどあらゆる点においてお世話になり、感謝の気持ちでいっぱいである。

早期英語教育幻想 ～マレーシアと日本の決定的相違～

長野諒生

英語を「学ぶ」日本人と英語を「操る」マレーシア人

In ordinary conversation we speak Malay or Chinese, so we're not really good English speakers. Hahaha. 流暢な英語でマレーシアの学生はこう言った。私は驚きを隠せなかった。英語をいとも簡単に話す彼らにとって英語はもはや母国語の感覚で使っているのだろうと思っていたからだ。しかし実際は私たちと同じように、英語は後から学ぶ外国語、という感覚のようである。なぜ普段使わない英語をいともたやすく操れるのか問うと、幼少期から英語を学んでいたのが大きいと思う、と話した。確かに、幼少期の脳は最も柔軟で物事を覚えるのが早く言語学習に向いているということは一般に言われている。そこで私は、7年以上英語を勉強してきた自分の英語力がマレーシアの人達に比べ決定的に劣っている主な原因が初等教育段階での英語学習にあるのではないかと思い、日本でマレーシア同様の早期英語教育を初等教育課程で行えば日本人もマレーシア人のように英語を簡単に使えるようになるのではないかと考えた。本稿ではこの言説について、マレーシアと日本の英語教育の比較を交えながら考察する。

マレーシアと日本の英語教育の違い

まずマレーシアと日本における現在の英語教育を比較する。マレーシアはかつてイギリスの植民地であったため、その影響で教育制度はイギリスに類似しており、小学校が6年間、中学校は3年間、高等学校は2年間、大学進学課程が2年間で、大学が3年～6年間となっている。また、マレーシアの英語教育は小学校1年から始まり、週5コマ程度の英語教育が行われている（野口 2016）。一方、日本の英語教育は小学5年からで、週2コマ程度（2019年度までは「外国語活動」のくくりで週1コマ程度であった）（文部科学省 2019）とマレーシアに比べてかなり少ない。これはマレーシアと日本の英語教育の大きな相違の一つである。しかし、さらに重要な違いは、マレーシアでは英語学習の授業とは別で、理数科目の授業を初等教育の段階から全て英語で実施している点にある（手嶋 2004）。この政策によりマレーシア人は幼いころから英語を用いることに慣れており、日本の英語教育との間に決定的な差を生み出している。日本の英語教育では英語は「学ぶ」対象でしかなく、マレーシア人と比べ「用いる」ための訓練が圧倒的に不足しているのだ。

早期英語教育信仰への批判的考察

こうしたマレーシアと日本の英語教育の違いを踏まえると、マレーシアのような早期英語教育政策を実施すれば日本人も彼らと同じように英語が自由に話せるようにな

るのではないかと、思えてくる。実に本稿の焦点は、この安直な期待が果たして現実的であるのかを考察することにある。グローバル化が進み、英語力が重視され始めてから久しい昨今、英語を学ばなければならないという言説は常識と化し、そのために早期英語教育政策が最重要であるとする主張はほぼ当然のこととして、社会に受け入れられている。しかしそれに伴うデメリットの分析が十分になされていないのは問題である。マスメディアや民間の英語教育団体の広告等により早期英語教育を推進する言説に日々さらされ、早期英語教育を絶対的に推進すべきものとして信奉する日本人の傾向に警鐘を鳴らす意味でも、批判的な解釈者の存在は重要である。

日本でマレーシアのような早期英語教育政策を実施する上で大きな障壁となるのが、歴史的背景の違いである。日本が植民地化された歴史を持たず独自の言語文化を形成してきたのに対し、マレーシアは 1957 年までイギリス植民地であった影響から英語圏の影響を強く受けている。さらに、多民族国家であり、日常的にも知らずのうちに英語にさらされている点でも、英語話者に対峙する機会が非常に少ない日本と環境は大きく異なる。さらに重要な相違点として、学習する英語の文構造が日常的に使う母国語と決定的に異なっている点があげられる。日本語では述語を文の最後に置くのが普通だが、マレーシアで使われる英語、マレー語、中国語はいずれも述語を主語の直後に置く構造になっている。マレーシア人にとって英語は母国語と文構造が同じであるため、日本人に比べて習得がずっと容易なのだ。日本で早期英語教育を実施することは、根本的に異なる構造をした二つの言語を、論理的思考を確立する以前から同時に学習させることに他ならない。これは子供に大きなフラストレーションを与えるだろう。こうした違いを踏まえると、日本でマレーシアのように理数系授業を英語で実施することはほぼ不可能と言える。理数系授業を英語で実施できないとなれば、単純に英語という教科の学習時間を増やすしかないが、これは算数や理科、美術や体育といった他教科の学習にさける時間が大幅に減ることを意味する。理数系の分野で学習到達度が世界トップレベルの水準を誇る日本（OECD 実施の学習到達度調査（PISA）の結果（2018 年）によると平均得点でみた日本の国際順位は 79 ヶ国中科学的応用力が 5 位、数学的応用力が 6 位）（国立教育政策研究所 2019）だが、こうしたデメリットを無視して早期英語教育を強行すればこの数値が低下することは容易に想像がつくだろう。

早期の英語教育政策が無意味なものとして否定するわけではないが、マレーシアで実現しているからと言って安直に日本で早期英語教育政策を推進するのは危険であり、実施する場合そのデメリットを正確に認識したうえで行うことが大切であると思われる。

終わりに

私はマレーシア人の英語力を早期英語教育政策と短絡的に結び付け、日本においても同様の政策を行うことで勉強らしい勉強をせずとも、英語を自由に操れるようになるのではないかと、淡い期待を膨らませたが、実際のところマレーシアの早期英語教育政策の日

本における実施は、マレーシアと日本の歴史的、言語的背景の相違に起因する様々な問題を伴うことが分かった。私たちが日本における英語教育について考える際には、安直に早期の学習を絶対的理想とするのではなく、それが同時に持つトレードオフ、ないしは日本の歴史的、言語的特質についても思考を巡らせ、正しく認識することが大切であろう。そして何より英語学習者たる私たちは、筆者のようにマレーシア人に比べて英語力が決定的に劣っている原因を過去に見出すのではなく、今自分ができることに焦点をあてて謙虚に学習する姿勢を持ちたいものである。

参考文献

- 野口美紀子, 2016, 「マレーシアの英語教育の実際と国際理解教育の実践について」, (2023年3月30日取得, <https://www2.ugakugei.ac.jp/~kokuse/pub/report/0878f1d98736034477bfb6b9e1bdb4beb17ae9f8.pdf>).
- 文部科学省, 2019, 「新学習指導要領全面实施に向けた小学校外国語に関する取組について」, (2023年3月30日取得, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/icsFiles/afieldfile/2019/09/11/1420968_2.pdf).
- 手嶋将博, 2004, 「マレーシアにおける教育言語改革の課題 ー教育言語としての英語の導入をめぐるー」, (2023年3月30日取得, <file:///C:/Users/kymk2/Downloads/BKK0000621.pdf>).
- 国立教育政策研究所, 2019, 「OECD生徒の学習到達度調査 (PISA)」, (2023年3月30日取得, <https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01point.pdf>).

マレーシアでの成長記

堀田茉陽

はじめに

この海外研修は私にとっては四年ぶりの海外渡航となった。偶然にも高校一年の夏、コロナ前最後に訪れたのもマレーシアで、何だか深い縁を感じた。ここでは、マレーシアの多文化社会において、英語とコミュニケーションについてバディや現地の人々との交流の中で得た経験と知識をもとに考察していく。また、最後に自分自身の成長した部分や学んだことと今後の目標を述べる。

英語とコミュニケーション

バディの大半は中華系で、第一言語は中国語、その他にマレー語、英語を話していた。外務省（2012）と、マレーシアの教育システムでは、初等教育が六年と中等教育が前期三年と後期二年の合計五年、その後大学予備教育を一年から一年半受けて大学に進学する。手嶋将博（2005）によると、初等教育での教授言語はマレー語、中国語、タミル語の三種類あり、英語の必修授業数も日本より多く、早期から英語教育に力を入れていることがわかる。また、中等教育では、人口比の最も小さいインド系のためのタミル語で教える公立学校はなくなる一方で、一部では全授業を英語で教える学校もある。2003年からは初等教育、中等教育、大学予備教育で段階的に数学や理科の授業の言語が英語に変更されていった。このように英語に重きが置かれているのは、イギリスの植民地であったという背景や、グローバル時代を意識して特に科学技術分野での人材の育成を目指していること、多様な人種の中で英語が中立的な言語として日常的な場面でも使われていることなど様々な要因が考えられる。町の標識やレストランのメニューなども英語表記があるものが多かった。しかし、私が以前訪れた農村部など一部の開発途上の地域では、教育水準が都市よりも低く、英語を話せる人材が少なく、いまだ格差が残っている部分もある。

バディとの交流や政府機関、企業訪問を通して様々なバックグラウンドを持つマレーシアの人々とコミュニケーションをとる上で気づいたことがある。それは、今や英語は母語話者より第二言語として話す人々の数のほうが圧倒的に多く、その地域土着の英語もイギリス英語やアメリカ英語と同様に一種の英語として認められ話されているのではあないかということだ。現地では、言語の柔軟性から、異なる発音やアクセントのみならず、**Manglish** と呼ばれるような新しい単語までもが生み出されていることがわかるだろう。日本の英語教育は、主にアメリカ英語で、現地の英語に触れる機会はめったにない。そのため、初めてバディと話した時は慣れない英語に戸惑った。しかし、バディや現地の人々が英語を使う場面やその姿勢、態度から英語はあくまでコミュニケーション手段の一環としてしか捉えていないと肌で感じた。日本で英語学習をするとどうしても英語そのものに意

味があり、流暢に話せることが目的だと思ってしまう学生が多いのではないだろうか。私もその一人だった。しかし、マレーシアの人々と接して英語を上手下手で判断せず、そこに伝えたい気持ちがあるかどうかを重視しているということに気づいた。手段は何であろうとも一人一人と向き合い、お互いのことをよく知ろうとするその姿勢がどのような場面でも今後必要になってくると思った。

積極性と自己の他者に与える影響

三週間という期間の短さから、私はそこでしかできない経験やバディとの交流に後悔のないように積極的な姿勢をとるという目標を掲げ、一秒たりとも無駄にしたいと考えていた。と同時に、私自身シャイ、消極的な性格のため、出発前は自分の掲げたハードルを越えられるのかと不安に思っていた部分もあった。しかし、マレーシアでは、日常生活から多様な言語が行き交っており、宗教や文化の異なる他者を尊重し受け入れ、共存していくような包容性のある社会が成り立っているため、だれでも自己表現が可能であり、私も意見を受け入れてもらえるような雰囲気を感じた。今まで何度か海外経験はあるが、ここまで友達として対等に自分が感じたこと、思ったことを言い合える関係性は初めてだった。電車やバスを待っているときも、食事中、授業中も、道路を歩いているときも、自分の中でアンテナを張り巡らせて、町の景色や人々の様子を観察しそこから湧き出てくる自分の好奇心を逃さないようにしていた。そうしてとにかくバディと会話をして、最終的にはシャイなはずの私が色んなバディから「よく話す外交的な人物だ」と言われるようになった。

また研修中、ある日本人参加者の一人にこの研修に対しての私の考えや姿勢が刺激になって頑張ろうと思ったと言われ、驚いた記憶がある。これまで自分自身がとっている行動が他者にまで影響を及ぼすとは考えたことがなかった。しかし、良い行動も悪い行動もみなお互いを観察し影響を及ぼしあっており、自分にも他者を変える力があるのだと実感した。そして、出発前掲げていた自分自身の中での目標が達成できた今、マレーシアで活動していた時の自分の考えや物事への取り組み方などを日本に帰っても継続できるようにしていこうと決意した。

今後の目標

バディと関わる中で、彼らのマレーシアの一国民としての自覚や責任を感じた。歴史や政治、経済など多様なトピックで話をしたが、自分自身と比べて自国への知識が豊富で、自分の考えや意見を持っていると思った。将来の目標や夢に対する強い決意や自分の国をよりよくしたいという思いが感じられ、世の中にはここまで自覚をもって行動している同世代の人々がいるのかと圧倒され、尊敬の念を抱いた。それと同時に、私も日本人として世界中の人々と関わる時には日本のことについて胸を張って答えられるように、より一層勉学に励み幅広い知識を身につけ、自覚と責任を持たなければならないと身が引き締ま

った。マレーシアから学んだこれらのことを活かし、今後社会で活躍できるよう尽力していこうと新たな目標を持った今回の研修であった。

参考文献

外務省, 2012, 「世界の学校をしてみよう マレーシア (Malaysia)」, 外務省ホームページ (2023年3月31日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/malaysia.html>).

手嶋将博, 2005, 「特集 マレーシアの教科書」, 文教大学教育研究所ホームページ, (2023年3月31日取得, http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/kyouken/old_web/kyoukasho2005/kyoukasho.html)

留学の原点は比較

八木杏理

人生で初めての海外留学となる今回、留学先としてマレーシアを選んだ大きな理由は、マレーシアが先進国ではないことであった。大学入学前から世界の貧困問題や格差に興味があった私は、語学だけでなく経済発展に関連する事柄について留学を通して学びたかったため、GDPを尺度としたときの発展途上国へ行くことに興味があった。そして実際に3週間の留学を経て気づいたことを振り返ると、渡航先としてマレーシアを選択したことが正しかったと思えた。

マレーシアで得た新たな視点の一つは、人々が生活必需品に使う支出についてである。渡航前からマレーシアの物価は日本のおよそ3分の1程度だということを知っていたが、実際に様々な商品の値段を見てみると日本との価格比はモノによって大きく異なることを実感した。例えばクアラルンプールの中華街で購入した焼包（肉まんのようなもの）が2.3RM（約46円）であったり、一人前の啦啦炒米粉（揚げビーフン）が14RM（約420円）であったりするなど、市街地にある個人経営の店の食品は、日本のおよそ3分の1程度の価格と言えた。ただ、同じ食料品であっても、私がバディにおススメされて購入したケーキは一切あたり15RM（約450円）と、現地の一食分に相当する価格であり決して安くはなかった。他にもスターバックスの期間限定フラペチーノが20RM（約600円）で、日本における同等のものが600～790円であることを考えると、同じ食料品でもチェーン店やスイーツの商品は少し高くつく場合があることが分かった。他にも、クアラルンプールとジョホールバルのショッピング・モールに行く機会があったが、他国から輸入されたブランドの商品は日本のものとあまり価格差がなかった。GUCCIやDiorなどいわゆる「ブランド物」に限らず、ユニクロやPost-itなどの価格も、日本でのそれと比べて少し安いくらいで、大差はない。マレーシアでの平均年収を日本円に換算すると日本の2分の1弱である（Department of Statistics Malaysia 2020）（国税庁 2021）ことを考えると、このようなチェーン店の商品の購買に対するハードルが日本と比べて高くなり、かわりに個人経営の店の商品を購入する機会が増えるのではないかと考えられる。

これらの具体例を踏まえて私が考えた仮説は、「賃金に対して、相対的に生活必需品が安く嗜好品・娯楽が高い地域では、相対的に格差が広がりにくい」というものである。

もし、マレーシアのように生活必需品が安く、嗜好品・娯楽が日本と比べて相対的に高かった場合、貧困層は、人間が社会生活を営む上で必須と考えられる衣食住に関しては必ず商品を購入する必要があるが、それらの価格が賃金に対して相対的に安いので、彼らは経済的に生きやすいといえる。一方、富裕層にとっては生活必需品の選択肢の価格幅は広く、また嗜好品・娯楽を消費することもできるものの、それらは相対的に日本のものよりも高いので、その利益は日本において購入された時よりも賃金に対する比率が高く、労働

者により多く還元されると考えられる。日本においては、格差是正のために富裕層のもつ資産を貧困層に再分配する方法として、累進課税を課したり、公共事業を行って雇用を創生したりする方法が取られているが、もし商品の価格比が富の再分配に影響を与えたとしたら（できるかはわからないが）、物価の変動に介入することが格差是正につながりうるのではないかと考えた。

ここでマレーシアと日本における経済格差の状況を比べるために、格差の度合いを数値で表すジニ係数（格差が大きいほど1に近づき、小さいほど0に近づく指数）を比べる。日本における当初所得ジニ係数（税金の徴収や社会福祉による給付金を差し引く前の給与から計算した値）は0.5594（厚生労働省政策統括官付政策立案・評価担当参事官室2017）、再分配所得ジニ係数（再分配後の所得で計算した値）は0.3721（厚生労働省政策統括官付政策立案・評価担当参事官室2017）であり、マレーシアの当初所得ジニ係数は0.411（DOSM Official Portal 2020）である。これらのデータより、マレーシアの当初所得ジニ係数は日本における当初所得ジニ係数よりも低く、再分配所得ジニ係数よりも高い。そのため再分配措置が取られる前の段階では、日本と比べて、マレーシアの物価が格差是正に貢献しているかもしれないと考えられる。しかしこのデータだけを考えると、日本における再分配措置ほどは、マレーシアの物価が影響を与えることができないという仮説も立てることができる。もちろん、格差には物価のみならず法制度や税制度、人口動態など様々な社会背景が影響を与えるため、日本とマレーシアの二か国のサンプルのみでは当然正しい検証結果を得ることはできない。ただ他国の物価や税制度、格差の状況を調べることによって、私が最初に立てた仮説をより厳密に検証できそうだということは分かった。

他にもマレーシア国民の経済状況として興味深いなと思ったのは、マレーシア大学生の経済活動についてだ。バディから聞いた彼らの生活は日本の大学生とは異なる点が多かった。日本の大学生が打ち込むこととして、一般的に「勉強・アルバイト・サークル活動」の3つが上がるほどには、日本の学生はアルバイトを行うのが当たり前だが、マレーシアの大学生はアルバイトをしている方が珍しいそうだ。アルバイトをしない理由を複数のバディに聞いたところ、皆が口をそろえて「大学の勉強が忙しくて時間が取れないから」と答えた。ただ、逆にアルバイトをする必要がない理由を探ったところ、出費が少ないことが分かった。日本の学生がアルバイトをする理由は、主に趣味のため、生活費のため、社会経験をするためであるが（マイナビ2022）、彼らが生活費や娯楽に充てるお金をどこから出しているのか聞いたところ、奨学金でまかなっているとのことだった。全てのマレーシア大学生が同様に奨学金で生活しているとは限らないが、少なくとも二人のバディは寮代や食費などをほぼ奨学金でまかなっていて、お金を使うような娯楽もあまり無いのでアルバイトをする必要がないと言っていた。日本でも様々な奨学金制度は存在するが、ここまで全面的にサポートする奨学金はマレーシアほど多くの生徒に対して枠を設けていないと思うので、日本が参考にすべき他国の教育制度として、より詳しく調べてみたいと感じた。

私は高校生の時から、大学生になったら一年間海外に留学したいと考えていて、また大学生になってからは留学以外にも様々な場所へ行きたいと考えるようになった。その意義を考えたとき、海外で見て気づきを得たことを日本に持ち帰り、よりよい日本づくりに還元したいのだなと思った。今回の留学は、ただの観光にならないようにということだけ気を付けていたが、自分が気付かないうちに日本とマレーシアを比較して（特に興味のある経済の分野について）、新たな学びを得ようとしていたなと思う。当初はマレーシアを発展途上国の一つとしてしか見ておらず、正直言って学ぶ対象とは考えていなかったが、実際はどんな事象も日本に活かせるし、良い学びを得られたなと思う。今後は二国の違いだけでなく、複数または世界全体を俯瞰して見られるような視点を手に入れるべく、精進していけたらいい。

参考文献

Department of Statistics Malaysia, 2020, 「DOSM Official Portal」, (2023年3月31日取得, <https://www.mycensus.gov.my/>).

国税庁, 2021, 「令和3年分 民間給与実態統計調査」, (2023年3月31日取得, <https://www.nta.go.jp/publication/statistics/kokuzeicho/minkan/gaiyou/2021.htm>).

厚生労働省政策統括官付政策立案・評価担当参事官室, 2017, 「所得再分配調査」, (2023年3月31日取得, <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/01-01-08-09.html>).

マイナビ, 2022, 「アルバイトをする目的」, (2023年3月31日取得, <https://www.itmedia.co.jp/business/articles/2207/05/news130.html#:~:text=%E3%82%A2%E3%83%AB%E3%83%90%E3%82%A4%E3%83%88%E3%82%92%E3%81%99%E3%82%8B%E7%9B%AE%E7%9A%84%E3%82%92,38.6%EF%BC%85%EF%BC%89%E3%81%A8%E7%B6%9A%E3%81%84%E3%81%9F%E3%80%82&text=%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E7%94%9F%E3%81%8C%E3%82%A2%E3%83%AB%E3%83%90%E3%82%A4%E3%83%88%E3%82%92%E3%81%99%E3%82%8B,%EF%BC%85%EF%BC%89%E3%81%8C%E6%9C%80%E5%A4%9A%E3%81%A0%E3%81%A3%E3%81%9F%E3%80%82>).

猫大国マレーシア

石崎侑

はじめに

一橋大学におけるマレーシア研修では本当に様々な発見があり、自分にとって大きな成長の機会となった。しかし私がマレーシアに来てみて一番驚いたのはその猫の多さである。待ちに行けば路上に猫、レストランの机の下に猫、大学のカフェテリアに猫、バスケットコートに猫、コンビニエンスストアのお酒コーナーに猫など様々な場所に猫を見かける。さらにその猫たち非常に人懐っこいのである。本レポートではなぜマレーシアではこんなにも猫と人との共生ができているのかについて考察していく。

猫と UTM

まずは身近な例から考えていこうと思う。猫を多く見かけたのはマレーシアの街中やレストランに限った話ではない。マレーシア工科大学（UTM）のキャンパス内にも猫は多く生息している。バディのひとり私たちが UTM に到着した際、バスの中で「UTM には多くの生物、猿、豚そして馬などが生息しており、私たちはここを動物園と呼んでいる」という話があった。確かに野生の猿や飼育されている馬は見るけれど、しかし目に付くのは我が物顔で UTM のいたるところにふんぞりかえっている猫であった。私たちがマレーシア工科大学にいる間泊まっていた寮にはカフェテリアがあるのだが、そこにも当然のように猫は居座っている。そこで食事をとった際になぜこんなにも猫がいるのかをバディに聞いてみたところ「マレーシアの人間は猫に対して友好的であり、特にこの学生はそれが顕著で、カフェに来た時に猫に餌をやったり、自分でキャットフードを購入して餌付けしたりしている。それが功を奏して毎月何匹かの猫がこの大学では生まれている」と話していた。実際、私が大学内の馬小屋を訪れた際も、何匹かの子猫が馬小屋の中でじゃれあっていた。またこれはマレーシア工科大学に限った話ではないが、マレーシアの気温は年平均で 27℃から 33℃と温暖で湿度も高く、猫の適温が 27℃から 28℃といわれているので猫にとっても過ごしやすいたことが繁殖がうまくいく理由ともいえるだろう。マレーシア工科大学の学生たちと猫は共存関係にあるのである。

マレーシアの人々と猫

このように、マレーシア工科大学と猫が共存関係にあるように、猫に対して友好的な人々であれば、確かに猫の数も多くなるであろう。しかし、なぜマレーシアの人々は傾向として猫に対して友好的なのだろうか。ここには二つの要因が存在すると思う。

一つは宗教である。マレーシアは歴史上もさまざまな文化が交錯してきた多文化国家であり、宗教もさまざまではあるが国の第一の宗教はイスラム教であり、国王もそれを信仰し

ている。外務省（2023）によれば、国民の64%がイスラム教を信仰しているというから、かなりのイスラム国家であろう。ここでイスラム教について少し調べてみると、「ネコはイスラム教において敬愛されている動物である」という。クルアーンに猫についての規定があるわけでないが、その起源はムハンマドが猫を溺愛していたからというのが定説である。Webライターのかくり氏（2022）によれば、イスラム教の預言者ムハンマド（生誕570年～632年）は大変な愛猫家で知られており、その中でも美しい純白の被毛とオッドアイを持ったムエザというターキッシュバンをこよなく愛し、毎朝、あいさつを交わしたとされ、またムハンマドは「猫への愛情は信仰の一つである」とし、猫の迫害や殺害を強く禁止したともある。また宗教情報センター（2011）では「ムハンマドの言行を記録した『サヒーフ・ムスリム』にも、猫については虐待した女性が地獄に落ちたと書かれているうえ、ムハンマドが猫好きだったという伝承もあるせいか、イスラムの国々には猫を大事にする人が多いようです。」と述べており、イスラム教国家では猫が比較的大切に扱われるようだ。

二つ目の要因は多文化かつ多民族国家であることからくる人柄にある。研修中にマレーシアの人々に共通して感じ取れたのが、除外を行わないということである。バディのみならず、レストランで働く店員、街ゆく人々にいたるまで、彼らは人に対していい意味で干渉しすぎない。これは体感であるが、マレーシアでは日本で感じられるような海外の人に対する目線というのは見られない。相手がどこの国であろうが、普段と変わらず接し、ルールの押し付けというものを行わない。マレーシアでは手で料理を食すという食べ方があるが、それを強要されたことはないし、スプーンやフォークを使っているからといって物珍しい視線を受けるわけでもない。マレー系、中華系、インド系そして土着の原住民が暮らす多民族で多文化な環境の中で彼らは互いの文化を尊重しながら、互いに自己の文化を押し付けずに共に生活している。そのような多くを気にしない姿勢というのが、人だけではなく猫にも表れているのではないだろうか。例えば、猫と人の生活領域を区切ることなく、レストランやコンビニに猫が入ってきていてもそれらを除外することなくいつのまにか共に生活しているという状況は、多文化で多民族な環境が作ってきた人々の文化だといえよう。

まとめ

マレーシア工科大学における学生たちと猫との共生で示したようなことは、マレーシアという国の至る場所で目撃することができる。このようにマレーシアという国で猫と人々が共生できている光景は、マレーシアの年中を通して温暖な気候に加えて、イスラムの教えという宗教的土台の上に、マレーシアの独特な人柄というものが合わさってつくられてきたものであるということができよう。

参考文献

外務省, 2023, 「マレーシア基礎データ」,

(2023年3月31日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>).

くくり, 2022, 「猫への愛情は信仰の一つである」イスラム教と猫の関係が面白い!」,
猫ちゃん本舗, (2023年3月2日取得, <https://nekochan.jp/knowledge/article/2889>).
宗教情報センター, 2011, 「第九回 イスラームは猫好き、仏教は猫嫌い?」, (2023年3
月30日取得, <https://www.circam.jp/kobore/detail/id=2892>).

言語がもつ「標識」としての効果

小山瑞生



5 言語で書かれた禁煙の標識（バトゥ洞窟）

私がマレーシア研修の中で興味深いと思ったことは、マレーシアで見聞きする言語が想像以上に多様であることだった。それによって、マレーシアで言語が民族を表す可能性が高く、言語を使用することは、実際にそうであるかにかかわらず、そのような「標識」になっていると感じた。また、日本でも状況は同じなのだと感じた。

まず、マレーシアで見られる言語についてである。バディたちは、3言語を当たり前のよう使い分けていた。街中で話しかけるときはマレー語を使い、バディ同士では中国語を使い、日本人に話しかけるときには英語を使う。大学の授業では少なくとも3言語を使えることが必要で、エッセイも3言語で書く機会があるらしい。しかも、エッセイに必要な文章語と異なり、会話ではマレーシアの方言が使われているため、両者の差異があり、それを使い分けているのだから複雑だと感じた。例えば、マレーシアで話される中国語は典型的な普通話ではなく、広東語のような中国の南方の言葉が混ざっていた。バディがよく言っていた「おいおい」といったような意味の「ハイヤー」は普通話ではなく、広東語系の言葉だとバディは言っていた。また、英語では語尾に「lah」を使って、日本語では「(だよ)ね」といった意味を追加したり、「you can」を「can」というなど、主語を省略したりしていたのが印象深かった。バディ以外でも、店員はバディに対してマレー語または中国語で話す一方、日本人に対しては英語で話すように、言語を使い分けている場面がとても多かった。

街中に見る言語についても場所によって様々だった。道路標識など公共の場所ではマレー語が多かった。しかし、公共の場所でも、地下鉄などではマレー語に加えて、日本と同じく英語が併記されていたし、他の店などでも意外と英語が書いてあった。中華料理店など中華系の店では中国語で書いてあって、店によってはそれに加えてマレー語や英語が書いてあった。マレーシアのアラビア語話者は少ないが、モスクにはアラビア語が書いてあったし、書店ではアラビア語の学習書が意外と充実していた。マレーシアは公用語がマレ

一語だからどこにでもマレー語が書いてあるのかと思ったが、公用語であっても、他の言語より圧倒的に頻繁に使用されているわけではないことが分かった。

余談だが、ファミリーマートやシャトレゼの店内で書かれていたのは英語と日本語だった。英語については、多くのマレーシア人が理解しているはずだが、日本語に関しては分かる人が多いとも思えないし、おそらく店員も理解しているわけではないと思う。その点では日本語が「役に立つ」ことはあまりないと思われるのにあえて書かれていることが、おそらく、日本企業としてのアピールなのだろうが、言語をイメージ戦略として使うおもしろい例だと思った。このように、研修の中でマレーシアでの言語使用は日本と比べて複雑で、社会レベルだけでなく、個人レベルでも複数の言語が使われていることが体感できた。



英語と日本語で書かれた値札（シャトレゼ）

マレーシアでは言語に関して興味深い経験が多くあったが、一番興味深いと思った経験は、途中から話す言語を切り替えているのを聞いていた時だった。Grab（Uberのような配車サービス）を使っているとき、はじめは運転手とバディはマレー語で会話していた。しかし、しばらくすると言語が中国語に切り替わっていた。マレー語でも十分に意思疎通をすることはできるし、中国語に切り替える「必要」があるかといえば、そういうわけではないだろう。しかし、たとえ流暢に見えても、母語で会話の方が楽なのであろうと感じた一幕であった。

また、それだけではなく、マレーシアにいる中で、言語が民族を示す標識のようなものとなっているのかもしれないと素朴に思った。中国語を話すことで、意図していたにせよ、していなかったにせよ、中国系であることを示すことになる可能性が高い。日本では日本国籍を持つ人のほとんどが、日本語を母語としていて、国籍と民族を分けて論じる機会はそのほどない。国籍と民族は同じものでないから、在日外国人や国内少数民族等日本でも一致しない例を挙げればいくらかもあるが、あくまでも論じる頻度の面から言うと、あまり多くはないはずだ。しかし、日本と比較すれば、マレーシアではそうではないだろうと感じた。マレーシアのコロナウイルスの接触確認アプリの登録をするとき、民族を選ぶ欄があって、民族と国籍とが別個であるという当然のことにあらためて気づかされた。

マレーシアではマレー系はマレー語、中国系は中国語、インド系はタミル語と、民族と母語が必ずではないにせよ多くの場合対応している。そういった意味では言語の使用は、そういった民族を示す「標識」としての効果も伴うことになるのだろうと思った。

私にとって、日本国内では、日本語はまるで空気のように存在していて、日本語以外の言語を話すときには、日常の場面ではそうそうない。普段の生活で日本語以外必要がないという日本人も多いだろう。少なくとも私はそうである。だから言語の使用が民族の標識としてはたらいっていることを意識しない。マレーシアで話されている、書かれている言語は場面によってそれぞれ全く異なるから、それが「標識」となるということに気づきやすかった。しかし、考えてみれば日本でも関西弁を話す人は、東京ではその人を関西出身であると判断させる効果があり、流暢でない日本語を話す人を海外出身であると思わせる効果があるように、本当は「標識」の通りではないかもしれないが、日本でも言語が民族、地域を表す「標識」となるのだという効果に気づかされた。

イスラム教国・マレーシアにおける同性愛者の位置づけ

櫻井彩乃

はじめに

本研修を通して UTM のバディから教えてもらったマレーシアに関する話のうち、筆者にとって最も興味深かった学びは、イスラム教国ならではのマレーシア人の同性愛者や同性婚に対する価値観である。本エッセイでは、まず同性愛者に関するバディとの会話で気付いた点を述べ、彼らの権利に対する国民の考えや社会の制度について現代の日本とマレーシアの状況を比較したあと、イスラム教国マレーシアにおける多文化社会のあり方に対する考察として「必ずしも多様な価値観を全て受け入れる基盤が整っているという訳ではない」と結論付ける。

同性愛者の権利に関するバディとの会話

UTM の学生と会話する中で、最も盛り上がったトピックは恋愛に関する話であったと思う。夕食やツアー中の雑談などで、恋人の話や失恋話をバディと日本人学生の間で交換するうちに、同性愛者や同性婚の話に延長することがあった。本項では、これらのトピックに関してバディの意見が聞けた 2 つの場面を紹介する。

最初にバディと当トピックに関連する話になったのは、ジョホール州イスカンダルでのツアー後、夕食中にバディと同性婚に関する国の政策を話していた時であった。そこで、イスラム教国であるマレーシアでは同性婚は違法とされ、同性愛者というだけで刑罰の対象となりうる、ということを知ってもらった。その場にいた 1 人の日本人学生が「日本でも同性婚は法的に認められてはいないが、地域によっては同性カップルを公的に認める制度が導入されている。あなたは、マレーシアでもこのような制度の導入や同性婚が容認されてほしいと思う？」とバディに尋ねると、彼は「そうは思わない」と答えた。そう考える理由として、「マレーシアはイスラム教を国教としていて、同性愛はその教義に反する行為だ。僕たちはマレーシアの国民だから、国の宗教を一番に尊重しなければならない。だから、同性婚を国に認めてほしいとは思わない」と説明してくれた。

筆者は、彼が非ムスリムの中華系マレーシア人であったことから、イスラム教の教義よりもマイノリティの人権を優先に考え、「同性婚はマレーシアでも認められるべきだ」と答えるだろうと思いついておいたため、彼の返答にかなり衝撃を受けた。ムスリムであれば、自身が信仰する宗教の教義に反するため同性婚に反対する、という論理は信者のあり方として容易に理解できた。しかし、イスラム教を信仰しない者であっても「自分が住む国の宗教だから、同性愛者の権利よりも宗教の教義を一番に尊重すべきだ」という意見を持つ人が存在することを知り、国教を定めない日本に住む自分とは異なる価値観にはじめて触れたと感じた。非ムスリムであれば、性的少数者の権利を認めることが「正しい」

という考えを皆で共有できるという訳ではなく、イスラム教国への帰属意識から国教を最重要視することが「正しさ」とする考えもあるということを学んだ。ただ、この時点ではこのような考えは、ある一人の中華系マレーシア人の意見として受け止めており、非ムスリムの人々の総意として解釈してはいなかった。

また、マレーシア研修最終日の夕食中にも、他のバディと同性愛者に関連する話になった。そこでは、複数人のバディから「同性愛者の権利はイスラム教を国教とするマレーシアでは認められがたい。もし権利が欲しければ、マレーシアに住むのではなく、他国へ行った方が良いと思う。あくまでマレーシアはイスラム教国であるからだ」という意見を教えてもらった。この意見に賛同していた彼らの中にはムスリムだけでなく中華系の学生も4、5人いたことから、非ムスリムの若者の間であっても先に述べた「同性愛者の権利よりも国教の教えを第一に尊重する」という考えが広く共有されているのではないかと感じるようになった。

同性愛者の権利を巡るこの経験を通して、非ムスリムを含むマレーシア人の「イスラム教国の国民としての意識」を強く感じたと同時に、国教を定めていない日本の国民とは異なる「正しさ」を共有していると学んだ。次項では、同性愛者の権利に対する国民の考えや制度に関して、国教を定めていない日本とイスラム教国であるマレーシアを比較し、彼らを取り巻くマレーシア社会でのイスラムの影響力について検討する。

同性愛者の権利を巡る現代日本とマレーシアの状況

1. 現代日本における同性愛者の権利に対する国民の考えや制度

現代の日本では、国民の間で同性婚に対する容認の姿勢は高まりつつあると考えられる。NHK(2021)によると、日本の婚姻制度では結婚は男女間でのみ認められている一方、「ジェンダーに対する世論調査」では同性婚を認めることに「賛成」「どちらかといえば賛成」と答えた人々の割合は全体の約6割であった。賛成の理由として「誰にでも平等に結婚する権利があるから」という答えが8割近くを占めた一方、反対の理由としては「少子化が進むから」「結婚は男女ですべきものだから」「伝統的な家族のあり方が崩れるから」などが挙げられた。

同性愛者を巡る社会の制度に関しては、国としての動きはなかなか見られない一方、自治体レベルでは同性愛者のカップルを公的に認める動きが近年増加している。小椋(2023)によると、先進7か国(G7)のうち同性関係を法的に認めていない国は日本のみであり、岸田文雄首相は同性婚の法制化に関して「社会が変わってしまう」、同性婚を認めていないことを「不当な差別とは考えていない」と発言するなど、日本が国レベルで同性婚の容認に積極的に取り組んでいるとは言い難い。他方で、MARRIGE FOR ALL JAPAN(2023)によると、同性カップルを結婚に相当する関係として公的に認める「パートナーシップ制度」は、2015年の東京都渋谷区と世田谷区での導入以降、これを取り入れる自治体は急増し、2023年3月23日時点で、導入自治体は少なくとも271にのぼる。

このように、現代日本における同性婚に対する国民の考えは、容認派が過半数を占めている一方、少子化の観点や従来の結婚・家族のあり方に対する影響への懸念から、同性婚に反対する人々の存在も認められる。同性愛者の権利を巡っては国としての動きは鈍いものの、パートナーシップ制度にみられるように行政単位では同性カップルの公的保護に向けての動きは進んでいると言える。

2. 現代マレーシアにおける同性愛者の権利に対する国民の考えや制度

現代のマレーシアでは、第2項で触れたバディの意見のように、同性婚の容認に対して否定的な姿勢が国民の間で一般的であると考えられる。Ipsos(2021)によると、「LGBT+ PRIDE 2021 GLOBAL SURVEY」において、同性愛者の権利について質問されたマレーシア人のうち「同性カップルの結婚や、いかなる種類の法的拘束力も認めない」と答えた者は65%を占めた。

マレーシアの法制度に関して、多和田(2019)によると、当国ではイスラム教を理由に同性愛者を法的に処罰する法律が存在する。マレーシア刑法では同性間性行為が禁止されており、その規定はムスリム、非ムスリムを問わずすべてのマレーシア国民が従わなくてはならず、これを犯した者は20年以下の禁錮および鞭打ちに罰せられる。多和田は、当国においてクリスマスの商業化や臓器移植に関しては教義の解釈の変更などを通じて認められてきた一方で、セクシュアリティの領域では依然としてイスラム教の価値観を頑なに重視し、同性愛者に対する否定的な対応が支配的であると指摘している。また、小川(2015)によると、同性婚に関して非ムスリムとムスリムには異なる法が適用されるが、どちらの法でも同性婚の可能性は排除されている。

さらに、岸本(2018)によると、マハティール元首相は2018年のタイへの訪問中に、「マレーシアは性的少数者を受け入れない。私たちの価値観は私たちの思考や文明、宗教に基づいている。なにもかも西洋の価値観をまねる必要はない。押しつけはやめてくれ」と発言した。

このように、現代マレーシアにおける同性愛者に対する国民や国の姿勢は否定的なものが多い。筆者が聞いたバディの意見やマハティール首相の発言から、これらの態度の根拠の一つに、国教であるイスラム教に基づく価値観を優先する意識が考えられる。また、イスラム教を理由に同性愛者を法的に処罰する法律も存在し、非ムスリムにも適用される法律であっても同性愛者の権利が認められていない。多和田(2019)によると、同性愛者の権利擁護を求める動きも認められるものの、様々な社会的圧力によって抑え込まれ、彼らを巡る状況は簡単に変えられるものではないと指摘している。

このように、日本とマレーシアはどちらも同性婚が法的に認められていないが、その統制や根拠に関しては二国間で大きく異なると言える。前者では単純に法律の中で同性婚が結婚の形として想定されていないだけであるが、後者では同性愛自体が禁止かつ刑罰の対象となっており、これらを定める法律の中にはイスラム教を根拠とするものも多く存在

する。また、同性婚に反対する理由として、前者では少子化や伝統的な結婚や家族のあり方への影響が多く挙げられていたが、後者では国教であるイスラム教を重視する価値観から、同性愛者の権利容認に対し否定的な姿勢を取る者が非ムスリムであっても見受けられる。したがって、イスラム教国マレーシアでは、同性愛者を巡る国民の考えや社会の制度に関して、当宗教の教義だけでなく、当宗教が国教であるという事実自体も影響力を持っていると考えられる。

結論

本研修ならびに本エッセイでの調査を通して、マレーシアは多様な民族や宗教の存在を認める多文化社会である一方、イスラム教を国教としていることからその教義に反する同性愛者の権利が許容されがたく、彼らの性的指向や価値観に関しては受け入れられる基盤が十分に整っていないということを学んだ。イスラム教国への帰属意識から、国教であるイスラム教を優先事項と考える非ムスリムも存在することを知り、イスラム教国に属するマレーシア人には彼らなりの正しさが存在し、「宗教を信仰していない限り、人権尊重の観点から同性愛者の権利を認める事こそが正義だ」という自分の正しさが全てという訳ではないことに気付くことができた。この気付きを通して、自分とは異なる価値観に出会ったとき、自分の価値観が正しい、普遍的だと押し付けるのではなく、その違いの背景を知ることが、異文化を理解する一歩となることを学んだ。

参考文献

- 岡田真理紗, 2021, 「Vol.23 ジェンダー “社会の本音” は? NHK 世論調査より①」, NHK オンライン, (2023年3月31日取得, <https://www.nhk.or.jp/minplus/0029/topic023.html>).
- 小椋由紀子, 2023, 「同性婚の制度化、世界の潮流なのに…政府は「社会が変わってしまう」と消極姿勢 国内の世論も賛成多数に」, 東京新聞 Web, (2023年3月31日取得, <https://www.tokyo-np.co.jp/article/234818>).
- MARRIGE FOR ALL JAPAN, 2023, 「日本のパートナーシップ制度」, MARRIGE FOR ALL JAPAN ホームページ, (2023年3月31日取得, <https://www.marriageforall.jp/marriage-equality/japan/>).
- Ipsos, 2021, 「LGBT+ PRIDE 2021 GLOBAL SURVEY」, Ipsos ホームページ, (2023年3月31日取得, https://www.ipsos.com/sites/default/files/ct/news/documents/2021-06/LGBT%20Pride%202021%20Global%20Survey%20Report_3.pdf).
- 多和田裕司, 2019, 「現代マレーシアにおけるイスラームとセクシュアリティ」『人文研究』70巻: 113-131.
- 小川富之, 2015, 「アジアにおける同性婚に対する法的対応」『2015年度・福岡大学法科

大学院・国際シンポジウム』：833-928.

「マレーシア人」は何語を話すのか

櫻井かりん

はじめに

私は実際にマレーシアに渡航するまで、マレーシアの人々はマレー語で会話するものだと思い込んでいた。だがクアラルンプールの空港に到着し、バディたちの出迎えを受けると、すぐにその思い込みはひっくり返された。バディ同士は中国語で会話していたのである。そしてそこからマレーシアで3週間を過ごし、マレーシアがいかに多文化社会であるか身をもって感じてきた。本稿では、マレーシアにおける言語の使い分けと、マレーシアの英語“Manglish”という2つの言語の面からマレーシアの多文化社会について考察する。

マレーシアにおける言語の使い分け

マレーシアでは英語教育が進んでおり、バイリンガルが多いというのは事前知識として持っていた。だがバディたちはバイリンガルどころではなく、より多くの言語を操るマルチリンガルであった。具体例をいくつか挙げたい。本年度のバディは9割以上が中華系だったのだが、彼ら同士の会話は基本的に中国語であった。しかしマレー系の食堂に行けば彼らはマレー語で店員さんと話すし、もちろん私たち日本の学生とは英語で会話する。さらに彼らの中には中国語・マレー語・英語に加えて広東語や福建語を話すバディもいた。様々な言語を解する彼らは、相手や場所に応じて言語を使い分けしているのである。

だが、マレーシアで暮らしているのは中華系だけではない。外務省（2023）によれば、中華系は全人口の約23%で、マレー系は約70%、さらにインド系が約7%である。マレー系の多くはムスリムなのでアラビア語を勉強するし、インド系の中にはタミル語を母語とする人もいる。したがって、マレーシアでは様々な言語が使用されている。この多言語社会をよく表しているのが右の写真である。これは道の名前を示す標識なのだが、ここにはマレー語・アラビア語・中国語・タミル語・英語による表記がなされている。



マラッカの Goldsmith Street の標識

このように、様々な言語を母語とする「マレーシア人」を統一しているのが、国語であるマレー語なのである。マレーシアの公立学校では、初等教育はマレー語で教えるかマレー語を学習することが必須となっているし、中等教育はマレー語で行われている。よって、マレーシア人のほとんどはマレー語を話すことができ、マレーシアにおける共通語の1つとなっている。だが外国からの移住者・観光客も多いマレーシアでは、英語も共通語の1つとなっている。

マレーシアの英語 Manglish

前述の通り、マレーシアでは英語も共通語の1つである。イギリスの旧植民地という歴史的背景から、イギリス英語がベースの英語が使われている。しかしマレーシアは多文化社会のため英語にも様々な言語の影響が加わっており、“Manglish”と呼ばれる独特の英語が存在する。Manglishに関して以下に記すのは、私がバディと過ごした3週間で感じたことであって、全てのマレーシア人に当てはまるわけではないことに留意されたい。

正直に言えば、マレーシアでの最初の1週間はバディとの会話に苦労した時もあった。これは発音のせいだけではなく、文法や単語の用法の違いにある。

Manglishでは伝わりさえすれば細かい文法は気にしないようで、三人称単数現在形のsが省かれることは非常に多かったし、簡潔さを好むため、イギリス英語のような丁寧な表現を使うと困惑されることもあった。だが、私が最も困惑したのは、否定疑問文に対する答え方であった。なぜなら返事の仕方が日本語と同じだからである。本来英語であれば否定疑問文の答えはYesが日本語でいいえ、Noが日本語ではいとなる。だがManglishでは否定疑問文の答えはYesが日本語ではいいえ、Noが日本語でいいえとなる。例えば、“Don’t you like it?”と聞かれた時に“Yes, I do like it.”のつもりで“Yes”と言ってしまうと、Manglishでは“Yes, I don’t like it.”として受け取られるため、それが嫌いということになってしまうのである。鶴沢（2007）によると、マレー語の否定疑問文の「答え方は日本語式が基本」ということなので、Manglishにマレー語の影響が現れている可能性も考えられる。

また、Manglishの特徴の1つには“lah”や“ah”といった音が文末などに追加されるという点もある。例えば“I’m full lah.”とか“Can ah?”のような使い方がある。意味や用法など詳しい説明は省くが、これらの音は中国語から影響を受けているようである。これらが原因で困ることはなかったが、多文化社会の一角が表れていると思うと興味深い。

おわりに

このように、多文化社会に生きるマレーシアの人々は母語以外にも国語など様々な言語を使い分け、共生しているのだと身をもって感じた。また、マレーシアの英語であるManglishは共通語として簡潔さを追求しているし、マレー語や中国語など他言語の影響を受けているのも多文化社会ならではの点といえる。私が3週間のマレーシア滞在で得た学びの1つは、アメリカ英語やイギリス英語だけが英語なのではなく、Manglishのように他言語の影響を受けた英語も立派な英語だということである。

参考文献

外務省, 2023, 「マレーシア基礎データ」, (2023年3月26日取得,
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>).

鵜沢洋志, 2007, 『2007年度マレー言語研修テキスト1 マレー語：文法テキスト』,
(2023年4月16日取得, <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/95137>).

マレーシアと日本の移動手段の違い

菅村潤

はじめに

マレーシア滞在中に感じた日本との違いは、移動手段の面で最も印象的だった。特に、自転車およびGrab利用について、その実態や背景、影響などを考える。

自転車利用

現地にいる間、街中で見かける移動手段といえば自動車かバイクであり、自転車に乗っている人を全く見かけなかった。日本人にとってはごくありふれた移動手段であるため、自転車が一切走っていない道路を見たときには強い違和感をおぼえた。

この背景として、一つに、マレーシアが車社会であることが挙げられる。道路は自動車での運転がしやすいように設計されており、道幅は広く車線も多い。日本で見られるような自転車専用のコースは当然設けられていないため、交通量の多いなかで自転車を走らせること自体、とても危険だと考えられる。

加えて、マレーシアの気候も理由の一つである。街中を歩いているときにバディの一人が教えてくれたことだが、マレーシアは年中暑く降水量も多いために、自転車に乗る人はめったにいないという。実際、外の猛烈な暑さと比べて車内は涼しく快適であり、国民が自転車利用に前向きになりにくい環境であるといえる。

このような背景と理由があるため実現は簡単でないが、自転車利用を増やすことには多くのメリットがある。特に、温室効果ガスを一切排出しないことの利点は大きい。マレーシアに限らず、自転車利用者が走りやすい道路やインセンティブ付与制度を整えることが重要であると感じた。



Grab利用

Grabとは、一般のドライバーが自分の車に利用者を乗せて運ぶ配車サービスである。研修中はGrabを使って夕食を食べに行くことが多かった。マレーシアや東南アジア各国では主流の移動手段だが、日本では身近ではない。

日本でGrabが普及しない理由として安全上の懸念が考えられる。具体的に、一つは交通事故への懸念、一つは犯罪被害への懸念である。

Grabのドライバーは一般人であり、プロと比較すると運転の質は多少落ちると考えられ、それに伴って交通事故に遭う可能性も高くなると予想される。実際、現地でGrabを



利用していると危険な場面に遭遇することもあった。大学のキャンパスから街へ昼食を食べに向かっている最中、左前方から横断しようとしたバイクと一瞬接触したときがあった。大きな衝突ではなかったものの、初めての経験だったのでとても驚いた。Grabは現在日本で認められていないが、将来的に認められたとして、交通事故のリスクを減らすためにタクシーの方が好まれるのではないだろうか。

また、運転手とはいえ見知らぬ一般人の車に乗るため、誘拐などの犯罪被害に遭うおそれがあり危険だという見方がある。特に日本では、子どものころから「知らない人の車に乗らない」よう教えられているため、Grabのシステムに対して抵抗感を抱く人は少なくないと考えられる。

これらの懸念事項があるため、日本ではGrabが普及していないと思われる。利便性が高く、タクシー業界の人手不足解消や雇用の拡大などのメリットがあるものの、事件・事故のリスクについて考慮すると、今後すぐ受け入れられる可能性は低そうである。

おわりに

以上、現地で気づいたマレーシアと日本の移動手段、特に自転車とGrab利用における違いについて考えた。

リーダーシップとは何か～一橋生と UTM 生を比較して～

多田裕章

はじめに

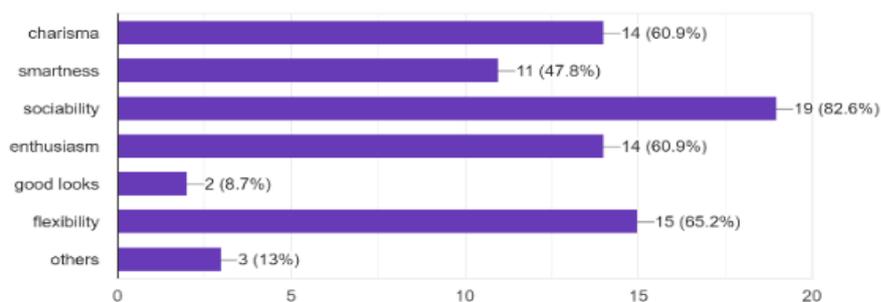
私は、この研修にサブ・リーダーという役割で参加した。普段から率先して物事の中で人を巻き込む性格ではないが、自身にとって人生初の海外を楽しむにあたって最も重要なものは、積極性ではないかと考え、自ら立候補した。実際に、マレーシアでは食べ物・生活様式・言語といった様々な部分が日本とは異なり、多くの経験を得るにあたって積極性は大切だった。本エッセイは、研修の中で感じた「良いリーダーとは何か？」という些細な疑問に端を発する。この疑問を抱いた背景としては、本研修において、グループ内で発言力のある人や信頼されている人、すなわち、日本においてリーダーの役職であると思われるような人が必ずしもリーダーという役職で働いていると感じられなかったからだ。バスの移動中や食事、観光の際の班行動といった機会で、リーダーというポジションでなくても積極的に私たちに引率して下さったバディの方が多く、日本では、こういった人達になかなか会う機会がないと感じた。そこで、「リーダーとは何かという問いに対する答えは、地域によって異なるのではないか」という仮説を立て、実際に本研修の参加者に Google フォームでリーダーシップに関するアンケートを実施することで調査を行った。

アンケート・調査方法

今回は研修の参加者全員に対して、“What is Leadership?” というタイトルの Google フォームを送った。回答は任意で、一橋生 12 人、UTM 生 11 人の合計 23 件の回答を得ることができた。アンケートの手順としては、以下のシンプルな 2 つのステップを踏んだ。

1. リーダーにとって必要な要素について、回答者が考えるものを全て回答してもらう。
2. 前の質問の回答の中で最も重要だと思う要素を選択してもらう。

What element(s) is/are (an) essential thing(s) for leaders? (you can choose more than one)
23 件の回答



(図 1)

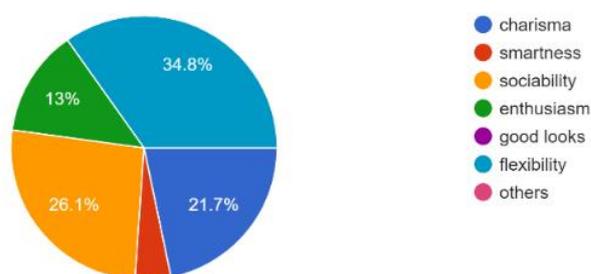
2 問目において、回答者がリーダーシップにおいて最も重要だと感じる要素は何かを考えやすくするために 1 問目を設定した。

1 問目の結果 (図 1) から読み取れることは、以下の 3 点である。リーダーシップを構成する要素において、第 1 に社交性が最も重要である点、第 2 に外見よりも内面や能力が重要である点、第 3 に賢さは要素になり得るが、最も重要な要素ではないという点である。ちなみに、その他 (others) の回答として、open-mindedness, responsibility, broad-mindedness といった回答が寄せられた。

2 問目では、非常に面白い結果を得ることができた (図 2)。この回答をさらに細かく分類し、一橋生回答者と UTM 生回答者で比較し表にまとめた (図 3)。図 3 から読み取れることは、以下の 5 点である。(1)UTM 生は要素が分散しているのに対して、一橋生は要素が偏向している。(2)UTM 生の中には、enthusiasm と smartness に回答した人がいたが、一橋生でこれらの要素を選択した人はいなかった。(3)一橋生は flexibility を最も重要だと考えている。(4)UTM 生は flexibility と同じぐらい enthusiasm を重要だと考えている(5)一橋生の方が UTM 生よりも charisma を重要視している。

Please choose the most essential things for leaders.

23 件の回答



(図 2)

	UTM		一橋	
enthusiasm	3	27.3%	0	0%
flexibility	2	18.2%	6	50%
sociability	3	27.3%	3	25%
smartness	1	9.1%	0	0%
charisma	2	18.2%	3	25%
合計(人)	11	100%	12	100%

(図 3)

最後に

本エッセイにおけるアンケートには不十分な点も勿論ある。アンケートの回答者が全員でないため、本研修に参加した一橋生と UTM 生の特徴を一概に結論づけることはできない。しかし、本研修に参加した人の中でリーダーシップに対する考え方に違いがあるのではないかと感じた自身の直観を定量的なデータに変換し、比較することができて非常に楽しかった。

最後に、本エッセイを執筆するにあたり、アンケートに参加して下さったご回答者の皆様には心から感謝致します。

マレーシアと日本の飲食店の違い

張似晨

今回のマレーシア研修で様々な文化の違いを、身を持って経験し、驚いたことがたくさんあった。その中でも、食に関する違いを多く感じた。気候の違いからくる料理の違い、文化の違いによる食習慣の違いや、宗教上の理由からくる食事マナーの違いなど様々あった。その中でも、マレーシアの飲食店での慣習と、日本における飲食店での慣習の違いに焦点を当てて、その中から自分が学んだことを書こうと思う。

一つ目は、マレーシアの飲食店では持ち込み飲食が可能ということだ。他の店でテイクアウトしたものを、食べても大丈夫であると言われたときは少し驚いた。他の日本人の学生の驚きも伝わってきた。日本では、持ち込み飲食は禁止という不文律があり、もはや常識であるため、最初はかなり戸惑いを感じた。そして、二つ目は、全員が一つずつ注文しなくても問題ないということだ。日本では、1人1オーダーを要求する店が多い。これも、不文律であるようなものであると思う。また、居酒屋などでは、1人1ドリンクと1オーダーのように、細かく定められているところもある。そのため、マレーシアでバディがドリンク1杯だけ頼んで、夜通し友達と語るといったことや、大勢で店に入った際に注文しない人がいたことは少し驚きであった。

上記のマレーシアと日本の違いを考察した。考えられる理由は二つある。一つ目は、マレーシアが多民族国家であるということだ。多くの違った宗教や文化を持った人々がいる国であるということに起因していると考えられる。自身の体験談として、チームで中華料理を食べにいった際、ムスリムのバディが他の店でテイクアウトしたものを食べていた。その光景から、マレーシアでは宗教上の違いが原因で、必ずしも全員が同じものを食べるができない。そのため、持ち込み飲食が可能であり、全員が注文しなくても問題ないという慣習が生まれたと考えられる。

二つ目は、マレーシアと日本の食糧自給率の違いが挙げられる。日本の食料自給率は約38%（関東農政局 2018）と低く、多くの食料を輸入に頼っているため、飲食店における原材料の値段が高く、飲食業は利益が出にくい業界であることは周知の通りであると思う。そのため、日本の飲食店において回転率と客単価が非常に重要であり、持ち込み飲食の禁止と1人1オーダーはこれら上げるために必要であると考えられる。一方で、マレーシアは食料自給率が約70%（農林水産省 2021）と高く、食料品も安い。物価の違いもあるが、衣料品や日用品の値段が日本とほぼ同じにもかかわらず、マレーシアでの一食は日本円で約400円から600円と非常に安い。この価格設定からも推測できる通り、食品の原材料は非常に安く、店の回転率や客単価にこだわらなくても良いのではないかとということが考えられる。

以上のことから学んだことは、海外でビジネスを展開することの難しさである。海外事

業を展開する際に、現地の事情をよく考慮する必要があると講義でよく聞いていたが、それは法令の遵守や文化に対する理解であると大まかに理解していた。しかし、今回の研修を通じて、文化に対する理解とはどのようなことか、そして、海外ビジネスを展開する上で思わぬところで、つまり可能性があるということを確認した。この経験を、社会に出てからも生かしていきたいと思う。

参考文献

農林水産省，2021，「マレーシアの農林水産業概況」，（2023年3月30日取得，

https://www.maff.go.jp/j/kokusai/kokusei/kaigai_nogyo/attach/pdf/index-34.pdf）。

関東農政局，2018，「食料自給率」，（2023年3月30日取得，

<https://www.maff.go.jp/kanto/kids/future/selfsupport.html#:~:text=%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E9%A3%9F%E6%96%99%E8%87%AA%E7%B5%A6%E7%8E%87,%E6%B0%B4%E6%BA%96%E3%81%A8%E3%81%AA%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82>）。

トイレにシャワーがある理由

吉田萌花

トイレにシャワーがついている？

マレーシアに到着した次の日に出会ったのが、大学（MJIIT）の中にあったこのトイレである。



ハンドシャワー（赤丸部分）

入ってすぐ、トイレット・ペーパーがないことに対する焦りは感じたものの、横にあったハンドシャワーは一瞥した程度だった。「マレーシアのトイレにはシャワーがあるらしいよ」と渡航前に聞いていたから、意外性もなく、むしろ想像より大人しめのサイズで、興味を持つこともなかった。しかし、それからの一週間、訪れたトイレには記憶の限り100%ハンドシャワーがついていて、個室の床や便座が水浸しになっていることもあった。また、トイレを流したら自動的にハンドシャワーから水が流れ出したり、水洗のためのハンドルだと思って取手をひねったら（日本のそれほどの勢いではないものの）ウォシュレットのように便座の中から水が出てきたりすることもあったため、ハンドシャワーの存在を意識せざるを得なくなった。

ずっと日本で生活していた私にとって、床が濡れているのはまだしも、便座まで濡れているのは、多少なりとも不便だと感じた。シャワーはつけなくて良いから、トイレット・ペーパーを設置して欲しいと思った。トイレにハンドシャワーが設置されている理由に、宗教が絡んでいるとは気がついていなかった。

イスラム教の「水で洗う」規範

マレーシア滞在2週間目、UTMのリー先生が廊下を歩きながら「トイレがびしょびしょなのは、マレー系の人（※その多くはムスリム）は体のいろいろな部分を1日に何回も

洗わないといけないからだよ」と教えてくださり、ハンドシャワーに宗教上の理由があったとは、と驚いた。

ハンドシャワーでの洗浄について、実際にマレー系のバディさんに質問してみたところ、これはムスリムによる *wudhu* と呼ばれる身体を清めるための行為であるらしい。トイレに行った後に体の決められた部分を何箇所かを洗うのが通常であるようだ。最初に述べた通り、マレーシアで訪れたトイレには記憶の限り 100%ハンドシャワーがついていたことを考えると、改めてマレーシアの多数民族はマレー系であるのだという事実を思い出さずにはいられなかった。

民族に対する強い意識

マレーシアにおける多数民族はマレー系であるにもかかわらず、今回のプログラムでバディとして参加してくれた UTM の学生のほとんどが中華系であったのはなぜなのか。センシティブな話題であったため直接的に話題にするのは躊躇われたが、日常会話の中で何人かのバディさんとこのトピックに関して話すことができた。「民族が同じ者同士で友だちになることが多い。理由の一つに言語の壁があるだろう。中華系の人にとっては、やはりマレー語よりも中国語で話す方が楽である。結果として、中華系の人に参加するプログラムには中華系が多く集まりがちである」「マレーシアではマレー系優遇政策が取られていて、中華系はこういったプログラムに積極的に参加して、(成績評価の面で) ポイントを稼ぐ必要性がマレー系に比べて高い」などの意見があり、緊張感のある会話となった。私がマレーシアで日常生活を送っている中では、マレーシア人同士、異民族間であっても互いの文化を尊重しあって、多文化共生を叶えているように見えたし、その見え方を否定するわけではないが、民族間の境界線を感じないわけにはいかなかった。

ヤクルトのバーチャルツアーの後のアンケートで、「あなたの民族は？」という問いがあった(マレー系か、中華系か、ヒンドゥー系か、その他かを選択する欄があった)ことから、マレーシアにおいて民族に対する意識は強いものと予想された。

違い探しの一歩先

マレー系の人と、その他の民族の人の違いが N 個あるとしたら、1 人のマレーと、もう 1 人のマレーの違いも N 個ある。これは醜いアヒルの子の定理というもので数学的に説明できると言われている。白鳥の子はアヒルの子と見た目が違うからいじめられてしまったが、白鳥の子とアヒルの子 A に違いが N 個あるとしたら、アヒルの子 A とアヒルの子 B の間にも N 個の違いがあるというものだ。すなわち、世界中の人、ひいては全てのものを、客観的に同等に扱う場合、分類はおよそ不可能である。民族という分類は、ある特定の仮定における区別の一つでしかない。

無宗教の日本人とムスリムよりも、ムスリムの人同士の方が、似ているのではないかと感じることもあると思う。結婚制度を例にとっても、(多くのイスラム国家で) ムスリム

の人には一夫多妻制が認められているのに対し、日本では一夫多妻制は認められておらず、深い隔たりを感じるかもしれない。しかし、もう少し詳しくみると、イスラム教では本来、男女の平等が説かれており、4人までなら妻をめとることはできるとされているが、公正に扱うことが条件で、もとはといえば、戦争で多くの男性が亡くなる時代、女性や子どもを経済的に救済するために認められた制度である（並木 2021）。このことから、一夫多妻制は、男女の平等を否定する考え方であるとは一概にはいえない。そう考えると、隔たりが小さく感じられるのではないか。宗教による区別は、あくまで一つの軸に基づくものであり、しかも、その軸に基づく区別によって生まれる差も大して大きいものではないと思う。

トイレに設置されたシャワーで体を清める行為をする。マレーシアのトイレにシャワーがある理由を知った時は、宗教ないし民族によって生活スタイルの差がこのように現れるのか、と驚いた。しかし、その事実を知って「自分とは違う」と一歩引いてしまうのではなく、みんな同じ程度で異なって、同じ程度で同じだという前提を忘れないようにしたい。

参考文献

並木伸一郎，2021，『眠れないほどおもしろい世界の三大宗教——キリスト教、イスラム教、仏教 なぜ、こんなに劇的なのか』 三笠書房。

中華系の人々はブミプトラ政策をどのように思っているのか

河口桃乃

本研修では、マレーシアの実に多様な生活や文化、言語を体感し、毎日が新しい発見と学びに溢れていた。本エッセイでは、自身の関心の強い、マレーシアの経済政策の一つである「ブミプトラ政策」に焦点を当て、研修中に関わりの深かった中華系のバディの方々へのインタビューをもとに、考察や学びを述べたい。

ブミプトラ政策とは何か

ブミプトラ政策とは、1971年にマレーシアで本格的に導入されたもので、マレー系の人々や先住民の地位向上のために、他の人種に比べて教育や就労、政治の面で優遇するというものである。ブミプトラとは、「土着の民」を意味し、マレー系および先住民のことを示している（小野沢 2012）。例えば、国立大学入試の際には、「ブミプトラ」に該当する人々の受け入れ枠が、他の人種に比べて予め多く設定されている。そのため、経済的に不利な立場にあるマレー系等の人々は、大学入学のチャンスを一定程度享受することができる。一方で、中華系やインド系などの視点から見ると、限られた枠を巡って競争率が高くなり、入学が難しくなる。この政策の導入背景として、1969年の 5.13 事件が重要である。これはマレー系と中華系が激しく対立したことにより生じた暴動であり、当政策の本格的な導入の大きな契機になった（Morita 2021）。

中華系の人々はこの政策をどのように思っているのか

研修で親交を深めた何人かのバディに対して、本テーマに関してインタビューを行った。「この政策について一個人としてどう感じているのか」、「この政策が日常の人間関係にどのように影響を及ぼしているのか」などの質問を投げかけた際にいただいたお話の要点を以下に記す。

Aさん（中華系）

この政策は、確かに不平等だと思う。特に国内で問題視されているのは、マレー系の人々は、経済力や学力などの観点に関係なく、マレー系である限り等しく利益やチャンスを分配されるがゆえに、マレー系同士の競争が減ってしまっているということだ。これは、個々人の努力の動機や機会を奪うだけでなく、他人種からのレイシズムを助長することにも大きくつながっていると感じる。また、「教育を受ける機会」という観点では特に人種間での待遇の差が目立ち、国内でも頻繁に議論されている。例えば、数ヶ月前には1人の中華系の女性が、かつて SPM（マレーシアの全国共通試験の一種）において、全教科で最高評価の A+ を取得したのにも関わらず、教育省が彼

女の奨学金の申請を拒否していたことが明るみに出た¹。このことは国内で大きな議論を呼び、政府やこの政策は激しく非難された。ただ、これが日常的な人間関係に影響を及ぼすわけでは決してない。昔の世代では異人種間で仲が悪いこともあったと思うが、若い世代は理解が進んでいる。

Bさん（中華系）

私は小さい頃は、この政策に対して怒りを覚えることも多々あった。ただ、現在では受け入れているため、怒りを感じることはほとんどない。「政策によって自分達は不利であるから、私たちは人一倍努力しなければいけない」という父の教を小さい頃からずっと聞いてきており、大切にしてきた。ただ、この制度の影響で日常的な人間関係が悪くなるということはないと思う。政治的なレベルでの対立は一部あるかもしれないが、日常的にはお互いを認め合っている。例えば、この前私が外出時に怪我をした際、そこにいたマレー系の方が私の手当てをしてくれた。

これらのお話を通した新しい気づきとしては、当政策のあり方は、中華系等の人々だけでなく、優遇される立場にあるマレー系等の人々も含めた多くの人の「志」を削ぐないしは奪う恐れがあるということである。このことは、近年マレーシア内で注目されている「頭脳流出」という社会問題にも関連していると考えられる。これは、高い能力を有しているにも関わらず自国内では活躍する機会を得づらいため、自国でのキャリアや暮らしを諦め、海外に渡るという意味である。元々海外志向の人もいるかもしれないが、Aさんの女子学生の事例にあるように、国内での機会を得られずに志を折られる人の存在も考えられる。マレー系に焦点を当てても、努力の程度に関係なく等しく機会を与えられるため、努力の動機や志を奪われてしまう可能性があると考えられる。しかし、この政策を一概に非難することに対しては慎重にならなければならない。なぜなら、この政策によって、経済的・社会的に不利な人々が地位向上のチャンスを得ることで、新しい志を持つことができるという観点もあるからだ。実際に、この政策により経済格差の改善が成果として見られた。しかし、いまだにマレー系等とそれ以外（特に中華系）との経済格差の幅は大きいことが指摘されているということも重要である（小野沢 2012）。

このインタビューから私たちは何を学べるのか

このインタビューで印象的であったのは、中華系の人々は当制度に対して、各々個人的な意見を持っていながらも、日々の生活において異なる人種を認め、受け入れようとする強さ

¹ ここでの女子学生とは Jessica Sin Sook Kuan 氏のことである。詳しくは以下 URL を参照されたい。(https://says.com/my/news/girl-denied-overseas-despite-getting-9a-for-spm)

を持っているということである。このことは、実際の研修でも日々実感するものであった。例えば、学校やマーケットなどの日常的な場面において、身近にいたバディの方々は人種に関わらず、様々なバックグラウンドを持つ人々と、言語を使い分けながらコミュニケーションをとっていた。また、中華系、インド系、マレー系、先住民などあらゆる人々に関するそれぞれの文化や生活のことを理解し、私たちにそれらを教えてくれた。そのほかにも、日本の文化や制度について多くを知ろうとしてくれたと同時に、カテゴライズすることなく、一個人として、私たちに向き合おうともしてくれた。このことは、マレーシアへ研修に行ったからこそ得ることができた大きな学びの一つであり、今後もその姿勢を自身の考え方や行動につなげていきたい。

最後に、今回のインタビューでは、中華系かつ同世代の方々からお話を伺ったため、得られた知見には限りがあると思われる。そのため今後は、マレー系や先住民をはじめとする、より多くの人種、世代等の方々とコミュニケーションをとり、この政策についての理解を深めていきたい。

参考文献

小野沢純, 2012, 「ブミプトラ政策 多民族国家マレーシアの開発ジレンマ」『マレーシア研究』(1): 2-36.

Koki Morita, 2021, 「人種差別撤廃条約に加盟しないマレーシア」, 『GLOBAL NEWS VIEW』 (2023年4月9日取得, <https://globalnewsview.org/archives/14092>).

マレーシアの飲酒事情

嶋井涼羽

マレーシアとお酒

マレーシアで生活する中で、食に関して驚くことが多かった。全体的に食べ物の味付けが濃いことや、何かとチリソースをかける文化などがそれにあたるが、個人的にはお酒に関する驚きが最も大きかった。というのもマレーシアのお酒はとにかく高い。マレーシアの物価は安いと聞いてやや浮かれぎみの人には、特に注意が必要だ。価格にしておよそ7~10RM。水やジュースが1~2RM、寮の食事が1食5RM程度であることから、その異質さが窺える。また品揃えも、基本的にはビールのみで、KKマート（現地でよくあるコンビニ）に置かれていたのは、HeinekenやTiger、Guinnessなど日本でも飲める外国産ビールばかり。日本に返ってから調べてみると国産の地ビールもあるにはあったそうだが、少なくとも滞在期間中で見つけることはできなかった。



なぜマレーシアのお酒事情は日本と異なるのか？

では、マレーシアのお酒事情は何故こんなにも日本と異なるのか。バディ曰く、マレーシアでお酒が高いのは、酒税が他の品目よりも高く設定されているかららしい。マレーシアの人口比率は、マレー系約70%（先住民15%を含む）、中華系約23%、インド系約7%であり（外務省2023）、その多くは飲酒を禁止するイスラム教徒（マレー系）が占める。そのため殆どの国民はお酒を飲むことはない。当然マレーシアの立法機関であるマレーシア議会もイスラム教徒の議員の割合も高く、酒税が高騰するのも納得である。何なら2020年11月には、首都のクアラルンプール（KL）にて、コンビニや食料品店でアルコール度数の高いお酒の販売を禁止されかけたことがあったという（アジア経済ニュース2020）。ブミプトラ政策が今よりも緩やかになり中華系国会議員の割合が増えれば、酒税もそれに反比例して小さくなるのだろうか。1人の観光客として、レジに並びながらそんな淡い期待をしたのが思い出される。

中華系マレーシア人とお酒

これまでは、マレーシアと日本のお酒事情の違いについて触れてきた。しかし、マレーシアに住むのは、何も飲酒が禁止されたイスラム教徒だけではない。人口の 2 割を占める中華系マレーシア人はお酒をどのように思っているのか。先の KL でのアルコール販売禁止騒動の例では、マレーシアの華人団体がこの規制に強く反発したという。ネット上には、マレーシアの中華系はお酒に対して好意的だとする記事が散見された。これらの情報を基にすると「中華系＝お酒が好き」というイメージが頭の中で構築されそうである。ただ、実際に行ってみると、このイメージというのは必ずしも当てはまらないように思えた。というのも、私のグループの 3 人のバディは全員中華系であったが、その全員がお酒に対して否定的であった。全員が他のマレーシア人と比べても陽気なバディで、どう見てもお酒が好きそうなのに、3 人とも基本的にお酒を飲むことはないという。何故かと理由を聞くと「そもそも値段が高いし、健康にも悪いし、周囲に迷惑をかけてしまう」という返答が返ってきた。全くその通りである。これは個人的な感想だが、マレーシアでは 1 人 1 人の健康や環境への意識が日本と比べて高いように思える。日本と比べてお酒も飲まないしタバコも吸わない。バディの多くは環境に配慮して、再利用可能な水筒やマイスプーン・マイフォークを持ち歩いていた。タバコについては日本でも喫煙者が年々減少しているが、アルコールの健康被害や、SDGs に関連した環境配慮の姿勢は、少なくとも一橋大学生と UTM 学生の間ではギャップがあったと思う。このような個人的な意識の面からも、日本はマレーシアから学ぶ余地があるのではないかな。

参考文献

- NNA, 2020, 「コンビニで酒販売禁止、首都規制に賛否両論」, アジア経済ニュース, (2023 年 3 月 31 日取得, <https://www.nna.jp/news/2120417>).
- 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2008, 「マレーシア選挙 与党激減の謎」, 日本貿易振興機構アジア経済研究所ホームページ, (2023 年 3 月 31 日取得, https://www.ide.go.jp/Japanese/IDESquare/Eyes/2008/RCT200805_001.html).
- 外務省, 2023, 「マレーシア基礎データ」, 外務省ホームページ, (2023 年 3 月 31 日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>).

行動標識は、その土地の社会背景の鏡だ

～マレーシアと日本の標識比較で知る、社会背景の違い～

鍋倉くるみ

行動標識とは？

この個人エッセイでは、行動標識の定義を「日常生活で見かける、行動規制用のマークや文」とする。このように書くと堅苦しくなってしまうが、例えば、小学校の廊下にある「廊下は走らないこと」の貼り紙のような、生活に身近なものを想像してほしい。タイトルでは、行動標識は社会背景の鏡だ、なんて仰々しく書いてしまったが、私はたしかにそう信じている。なぜなら、過去に廊下を走った児童が0人で、これからもほぼ100%の確率で誰も走りそうにない小学校において、「廊下は走らないこと」という貼り紙は「廊下でギネス記録を更新しないこと」という貼り紙と同じくらいナンセンスだからだ。廊下を走る人が過去に一定数いた（もしくは警告しなければ将来的に走りかねない人が一定数いる）上で、それが危険に繋がるから警告するのだ。

なお、この個人エッセイでは、社会背景の違いを探ることを目的にしているため、両国の行動標識の有能性や効率性を比較・評価することはしない。

クアラルンプールの電車で見つけた行動標識



左：クアラルンプールの電車内の行動標識（鍋倉撮影）



右：京阪電車の行動標識（京阪電車 2023）

上記2枚は、電車内の優先席の行動標識だ。日本のほとんどの電鉄会社が、右の京阪電車と同じ内容の優先席マークを採用している。見かけたことのある人も多いだろう。この2枚を見比べたとき、5つのピクトグラムの右端にあるマークの内容だけがお互いに含まれていないということに気づく。クアラルンプールの行動標識が盲目の方を含むのに対し、日本の行動標識は心臓に疾患のある人を優先席利用対象者として挙げている。

この違いはどこから来るのだろうか。日本のほうが心疾患による死亡率が高いのかと考

えたが、心疾患は 2019 年の日本の死因の第 2 位（冬幻社ゴールドオンライン 2023）、2005 年から 2014 年のマレーシアの死因の第 1 位（アジア経済ニュース 2023）となっており、両国において心疾患が国として無視できない深刻な病であることに変わりはない。それでは、「なぜ日本が心疾患を掲載するのか」ではなく「なぜマレーシアが盲目の方を掲載するのか」を問うほうが本質的だ。マレーシアでは、盲目の方と遭遇する可能性が高いのだろうか。盲目の方の数を確認するデータを見つけられなかったため、ここで、失明の原因として日本では第 3 位に挙がっている糖尿病網膜症に着目する（糖尿病ネットワーク 2023）。これは糖尿病の合併症の一つだ。実は、マレーシアは 2017 年時点での糖尿病有病率が世界平均 8.5% の 2 倍に迫る 16.7% なのである（アジア経済ニュース 2023）。ちなみに日本の 2016 年時点での糖尿病有病率は 12.1% だ（斎藤 2018）。糖尿病にかかった全員が失明するわけではないが、糖尿病網膜症による失明患者数が世界平均よりも多い可能性は高い。この推察が正しいのかは分からない。マレーシアの国教であるイスラム教の聖書『コーラン』において、障害者の人権にたいする保障が述べられている（小村 2013）ためなのかもしれない。いずれにしろ、糖尿病有病率や宗教は日本とマレーシアの社会背景として大きな違いであり、行動標識からの発展的に学ぶこととしてとても興味深い。

まとめ

行動標識から社会背景を考察しようとするとき、そこに暮らす人々の行動文化までも見えてくる。クアラルンプールで私が撮影した右の 2 枚の画像からは、礼拝室の案内、ドリアン禁止（匂いのため）、エスカレーターでのつま先を覆うサンダルの着用禁止（暑いため着用者が多いが足元の巻き込み事故の可能性）など、日本との違いが読み取れる。これらは現地に行って自分で見つけるからこそ面白い。対面での異文化交流研修だからこそ触れられた学びであった。



また、街中の行動標識を撮りためている間に思ったのは、「行動標識が人々の想像力を制限しているのではないか」ということだ。電車の優先席を例に挙げると、「5つのピクトグラムで指定された人以外は優先席の優先的な利用に値しない」という価値観が形成されてやしないかということである。エスカレーターでの行動標識も然り、行動標識は単なる例示であって、標識に書かれていなければ何をしても良いという短絡的なものではないはずだ。行動標識が設置されている目的を考えて、柔軟に対応するのが望ましいと私は考える。日本の行動標識（≒“価値観”）以外の行動標識に触れた今、自身の行動が柔軟性を失っていないかを頻繁に自己確認するようになった。この姿勢はこれからも持ち続けたい。

参考文献

- 京阪電車, 2023, 京阪電車ホームページ, (2023年3月28日取得,
<https://www.keihan.co.jp/traffic/safety/priorityseat.html>).
- 幻冬舎ゴールドオンライン, 2023, 幻冬舎ゴールドオンラインホームページ, (2023年3月28日取得, <https://gentosha-go.com/articles/-/32676>).
- アジア経済ニュース, 2023, アジア経済ニュースホームページ, (2023年3月28日取得,
<https://www.nna.jp/news/1544546>).
- 糖尿病ネットワーク, 2023, 糖尿病ネットワークホームページ, (2023年3月28日取得,
<https://dm-net.co.jp/seminar/15/>).
- アジア経済ニュース, 2023, アジア経済ニュースホームページ, (2023年3月28日取得,
<https://www.nna.jp/news/1885503>).
- 斎藤重幸, 2018, 「我が国の糖尿病のトレンド」『日循予防誌』第53巻, 第3号, pp.211-219.
- 小村優太, 2013, 『イスラームにおける障害の表現』, UTCP Uehiro Booklet, No.2.
Philosophy of Disabilities & Coexistence: Body, Narrative, and Community, pp.73-87.

「他者とともに生きる」ということ

本多留梨

今回の研修を通して私が最も感じたことは、「人間はそれぞれ大なり小なり違いがあつて、それでもみんな人間で、みんな大切に尊い」ということである。

マレーシアは、マレー系約 70%、中華系約 23%、インド系約 7%という民族構成からなる多民族国家である（外務省 2023）。筆者はこの研修に参加することを決めた頃、マレーシアは多民族の共生にある程度「成功」している国であるという印象を抱いていた。しかし、渡航前にマレーシアの歴史についてリサーチしたところ、「マレーシアの歴史は民族対立の歴史」と言っても過言ではないほどに、様々な衝突を経て現在に至っているということがわかった。

私たちが今回現地でお世話になったバディは、総勢 17 名のうち 15 名が中華系、2 名がマレー系であった。国家の民族比率から考えるとかなり偏った集団である。彼らが在籍する UTM は国立大学であるから、マレー系優遇政策の対象となっており、マレー系に優先枠が設けられている。こうした事情から比較的裕福な中国系は私立大学や海外の大学に行くものだと聞いていたため、この比率には少し驚いた。

バディ同士の関わり方を垣間見ると、特に言語と食事という 2 つの側面を通して、マレーシアの人々が各々の民族や宗教の違いとどのように対峙しているのかが見えてきた。

マレーシアの公用語はマレー語であるが、この研修中は、バディ同士の会話における使用言語は、体感で英語 5 割、中国語 4 割、マレー語 1 割というところであった。初等教育は民族ごとに行われる場合もあり（文部科学省 2017）、それぞれの母語はそれぞれの人種に紐づいている。とあるバディの話によれば、中華系の学生同士であれば中国語、対マレー系ならマレー語、対インド系等なら英語というように、国内でも相手によって様々な言語を使い分けて会話が行われるようだ。各々が他者と話すための言語を獲得することで、異なる母語を持つ人々とのコミュニケーションが可能となっていた。

食事について、私のチームのバディは 3 人中 2 人が中華系、1 人がマレー系かつムスリムであったので、ハラルの制約上みんな食事をとるという機会を設けることがなかなか難しかった。そのような中でも、隔日で私たちを夕食に連れていく担当をローテーションしたり、グループを更に 2 分割したりして、できるだけ皆が豊かな食生活を送れるように対応してくれていた。

ブミプトラ政策は、民族間の不均衡を是正して多民族がうまく共生していくために実施されている、一種のアファーマティブアクションとすることができる。しかしこれによって保護されているのは一部の富裕層のみであり、中華系やインド系の間層以下との分断を深めているという現実もあるようだ（阪本 2010）。他者との共生が国家ぐるみの社会問題となっている感覚は、日本ではなかなか実感しにくい。3 週間の研修期間中、「自分とは

違う他者」という意識を身につけたことによって、同じ大学、同じ国で過ごしてきた学生同士でさえも様々な価値観や文化をもとに生きているのだと感じた。どんなに近しい存在でも、親友であろうと恋人であろうと、家族でさえも、一人一人は別の人間で、適切なコミュニケーションがない限り完璧にお互いを理解することは不可能である。ある意味当たり前のことだが、こうした意識が足りないためにすれ違い、時に大きな問題に発展していくのではないだろうか。バディたち同士の関わり方を見ていて、マレーシアの人々は相手の文化的背景をよく理解し、話し合い、時に適切な距離をとることで、お互いがうまく共存していく術を体得してきたのではないかと感じられた。

とある中華系のバディは、「人種問題についてはいろいろあるけど、**Chinese Malaysian**と認識されるよりは、**Malaysian** って認識されたい。私たちはみんなマレーシア人だから。」と話してくれた。この言葉が、帰国後もずっと心に残って離れずにいる。他者と生きることの難しさと素晴らしさを教えてくれたマレーシアの未来が明るいものであることを願っている。

参考文献

- 外務省, 2023, 「マレーシア基礎データ」, 外務省ホームページ, (2023年3月30日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>).
- 阪本一郎, 2010, 「多民族国家マレーシア—マレーシア (多民族国家) の教育制度への一考察—」『在外教育施設における指導実践記録』第33集, pp.126-129.
- 文部科学省, 2017, 「世界の学校体系 (アジア)」, 文部科学省ホームページ, (2023年3月30日取得, https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/10/02/1396848_016.pdf).

マレーシアのパーム油産業における環境問題について

松田稜路

はじめに

マレーシアにおける研修の中で、マレーシアの文化や伝統的産業に触れる機会があった。その中でもパーム油産業はマレーシアを大きく支える第一次産業であると同時に、マレーシアにおける問題の一つでもあるという説明を受けた。本報告書ではマレーシアのパーム油産業についてその問題点について実体験と共に理解するとともに、解決策についても考えたいと思う。



マレーシアのパームの木 (<https://wall.alphacoders.com/big.php?i=693322>)

パーム油産業について

パーム油とは、アブラヤシの実から得られる植物油の一つである。実際にマレーシアに行くと、現地ではパーム油は食用油としての用途のほかに、マーガリン、プラスチック、化粧品、石鹸や洗剤の原料として利用されているのを目に見ることができた。パーム油はマレーシアでは人々の生活に必要な不可欠なものとなっていると言えるだろう。

また、マレーシアはパームの生産地としても有名であった。現地では熱帯で生育されるパームの木であるヤシを実際に見る機会が多くあり、この多くのヤシがマレーシアを支えているという実感を持つことができた。

マレーシアでは、もともとゴムのプランテーションが盛んにおこなわれていた。しかし、1955年の世界銀行による提言によりゴムの依存度を減らすために1960年代にパーム油生産の推進とそれに伴うオイルパーム・プランテーションが拡大した。さらに、政府は農村における貧困削減政策として土地開発庁を通じてパーム油プランテーション開発を行ってきた。(中島 2009: 15)。また、2021年におけるマレーシア・パーム油の生産量1,812万トン、輸出量は1,557万トンとなっている(食品新聞 2022)。

パーム油産業の問題点について

パーム油産業における最も大きな問題点は森林の消失である。パーム油プランテーションには広大な土地が必要となるが、その開発に伴って大規模な森林伐採が行われる。東南アジアの典型的なプランテーションには約 10,000~25,000 ヘクタールの土地が必要とされている。World Wide Fund for Nature (WWF) が国連食糧農業機関 (FAO) 統計をもとに行った分析によると、1990 年の期間のサバ州を主としたマレーシアにおいて、パーム油プランテーションの拡大により少なくとも 70 万ヘクタールの熱帯雨林が消失したとしている (WWF 2005)。また、プランテーションの開発時、伐採の前後には「火入れ」をしてその地を整備することが多く、それが大規模な森林火災の直接の原因になるケースが続出している。森林火災がさらに天然林の消失を招く事態に加えて、煙の野生生物や人間への悪影響についても無視することができない。さらに、プランテーション開発される熱帯雨林は、さまざまな動植物が生息し、豊かな生物多様性の維持に欠かせない場所でもある。森林の消失により動物の住処が奪われ、生物の多様性を脅かしている。(中島 2009: 17-20)

解決策

私はマレーシアのマレーシア工科大学で環境に関する講義を受け、産業について、より持続性のあるものにしていくことが重要であると学ぶことができた。ここではマレーシアを長く支えてきたパーム油産業を持続していくための一例を紹介したいと思う。2008 年の高多の論文では、マレーシア農業開発研究所 (MARDI) 畜産研究センターによる JICA との共同で実験的試みについて紹介されていた。この開発プロジェクトでは、巨大なオイルパームの葉を細断し、太陽熱乾燥施設で乾燥した上、他の農業副産物を混合して栄養価の高いペレット状の飼料にする。これが実用化され、全国に普及されることで、葉の 5% が飼料に再利用され、マレーシアの牛肉、牛乳、乳製品需要をまかなえるだけの畜産牛の飼料を供給できるとされている。これは廃棄物を再利用することに限定されず、熱帯雨林破壊による新規の牧草地開発を必要としなくなるメリットがあった (高多 2008)。

まとめ

本報告書を執筆するにあたり、マレーシアのパーム油産業について詳しく知ることができた。マレーシアではパーム油が大きな問題をはらんでいる中、パーム油自体をなくしていくわけではなく、より持続的で効率のよいパーム油産業を目指していく研究もあった。実際にマレーシアに行き、パーム油の産業を目の当たりにした私としては、パーム油産業が持続的により良い方向に進んでいることを喜ばしく思った。

参考文献

中橋良介, 2009, 「マレーシア、ボルネオ島のエコツーリズムとパーム油プランテーションについて」, 大沼あゆむ研究会, pp.15-20,

<https://onumaseminar.com/assets/GraduationPapers/07th/nakahashi.pdf>, (2023年5月31日最終閲覧).

高多理吉, 2008, 「マレーシア・パーム油産業の発展と現代的課題」, 国際貿易投資研究所, <https://www.iti.or.jp/kikan74/74takata.pdf>, (2023年5月31日最終閲覧).

食品新聞, 2022, 「パーム油 価格の上昇圧力強く マレーシアと情報交換会」, <https://shokuhin.net/54604/2022/04/04/kakou/yushi/#:~:text=21%E5%B9%B4%E3%81%AE%E3%83%9E%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%B7,10.5%EF%BC%85%E6%B8%9B%EF%BC%89%E3%80%82>, (2023年5月31日最終閲覧).

コラム①マレーシアでみた植物

文責：石崎侑

常夏の国マレーシアには、日本では見られない植物がたくさんある。中には毒々しいようなきれいな花であったり、不思議なおいを放つ草であったり、とげとげしいフォルムをした大樹であったり、その姿は多様性にあふれている。そんなマレーシアの独特な植物の中で、私の目についたものをこのコラムでは紹介したいと思う。

私たちが最初に降り立った地、マレーシア最大の都市クアラルンプールは、日本の東京と同じように交通網が発展し、大型ショッピング・モールやビルが立ち並ぶ自然とはかけ離れた都市に見える。しかし、その都市のランドマークといってもよい世界一高いツイン・タワーとして知られるペトロナス・ツインタワーに隣接する KLCC というショッピング・モールでは、マレーシアらしい植物を見ることができた。KLCC パークでは、ツタのような幹が複雑に絡み合うマングローブが至るところに生えていた。元来マングローブは河口の近くに生えるものなのだが、ここでは地中から根を伸ばしてすくすくと大きく育ったマングローブを目にすることができた。初めて近くで見た興奮から、マングローブにつかまらずにはいられなかった。このように昼間は親しみやすいマングローブだが、夜になって、照らされた姿はとても不気味である。昼間のようにふざけて幹の中に入っていくものなら、そのまま吸い込まれていきそうな感じがした。



このマングローブは、マラッカではまた他の姿を見せてくれた。海に面し、街を川が流れる街マラッカは、かつて海港都市として発展し、そして様々な国に占領されその文化を受容してきた。国際性に彩られた街を流れる川を中心とした景観がとても美しいマラッカだが、その川沿いを歩いていると、マングローブが川沿いにたくさん生えているのを発見した。しかしこのマングローブは、クアラルンプールで見たものと少し異なっている。ま

ず下の方に注目してみると、何やら水面から大量にとげとげしたものが顔を出している。はじめはマングローブとは別の何かかと思ったが、一緒に歩いていたバディのエディソンによると、これはマングローブの根だそうだ。マングローブは酸素を得るために根を地中から水面に出すように伸ばしているのだ。さらにこのマングローブへの視線を下から上の方にやっていると、ところどころ、マングローブとは別と思われる大きな葉っぱが集まっている。はじめは「マングローブって変なところに葉が生えるんだな」と思っていたのだが、これもエディソンによると、マングローブとは別のバードネスト・ファーンという植物だそうだ。この植物は寄生植物で、木の幹などに寄生するのですが、その姿が鳥の巣のようなので、そのままバードネスト（鳥の巣）・ファーン（シダ）というそうだ。このバードネスト・ファーンは、時々ツボに入れられている姿が散見されるが、地元民がマングローブに寄生しているのを見つけると、取ってツボに入れておくそうだ。なんだかおもしろい。



コラム②マレーシアの食事について

文責：松田稜路

海外に渡るにあたって一番事前に知っておきたいこと、それは現地での食事である。ここでは、私が3週間、実際にマレーシアに行き、マレーシアで食べた食事に関する感想、おすすめの料理を紹介したいと思う。

まず、マレーシアの食事に対する率直でかつ、一番の感想は、脂っこいということである。肉にしろ、魚にしろ、油で揚げるといった工程がなされた料理が非常に多いと感じた。マレーシアでヘルシーに過ごそうという考えは早めに捨てたほうが賢明である。

次に感じたことは鶏肉の料理が多かったということである。マレーシアはイスラム教が61%、ヒンドゥー教が6%と宗教と密接な関係がある国である。イスラム教では豚肉を食べることが禁じられており、ヒンドゥー教では牛肉が禁じられることから、多くの人が食べることのできる鶏肉が多く普及しているのだと考えられる。

次に、マレーシアの食事の値段について説明したいと思う。多くの飲食店では、15リンギット（日本では450円ほど）あればおなかを満たすほどの食事を食べることができた。屋台や現地の人を食べるローカル・フードなどは、さらに安く食べることができる。一方、日本料理屋は高級店として認識されており、鉄板焼きのお店など、300リンギット（約1万円）ほどの値段のかかるところもあった。また、日本の飲食店とは異なり、マレーシアの飲食店では水を無料で飲むことができなかつたため、持参するか、注文する必要があつた。

おすすめの料理

1. ロティ・カナイ：マレーシアで人気のあるインド料理のひとつで、薄く伸ばした生地をパンケーキのように焼いたもの。カレーソースやダール（豆のスープ）などを付けあわせて食べる。日本でも食べる機会のあるナンを薄くしたようなもので、日本人でも食べやすかつた。



https://camelia.co.jp/user_images/magazine/thumb/278/201904091443270.jpg

2. チキンライス：マレーシアで人気のある料理で、鶏肉とご飯を一緒に煮込んだ料理である。癖がなく、マレーシアでは珍しく揚げない料理であるため、揚げ料理に飽きた際にはおすすめである。



https://stat.ameba.jp/user_images/20150927/20/oriori0208/57/bb/j/o0500037513437475052.jpg

次回研修参加者のための Q&A

文責： 櫻井かりん

Q. 英語はどのくらい必要？自分の英語力で足りるかどうか不安だ。

A. バディや UTM の先生方との会話は原則として英語になるが、一橋に入学できるだけの英語力と、話したい気持ちがあれば十分である。授業中に難しい専門用語が出てきてもバディや他の参加者が助けてくれる。

Q. マレーシア滞在中の食事にはどのようなものがあった？

A. 2022 年度の場合はバディのほとんどが中華系だったこともあり、中華料理を食べる機会が多かった。他にもマレー料理やインド系の料理、いわゆる西洋料理もあり、様々な料理を食べることができる。私たちはあえてお寿司やうどんなどマレーシアの日本食にもトライした。

Q. 海外が初めてで食事が口に合うか不安。

A. 正直に言えば、マレーシアでの食事に慣れるまで時間のかかる参加者も一定数いた。しかし、そのうち口に合う料理も見つかると思うので心配しすぎなくて良い。どうしても心配であれば簡単なレトルト食品やふりかけなどを持参するのをおすすめする。

Q. スマホのネット接続はどうすべき？

A. マレーシア用の SIM カードに差し替えて利用するのが比較的安価で回線も安定しており、使い勝手が良いと思われる。ローミングは SIM カード差し替えの手間がないが、高額になりやすい（一部のキャリアでは非常に安く使える場合もあるので要確認）。ポケット Wi-Fi に関しては、長期間借りるため SIM カードより料金が高くなりがちなことに加え、充電に気を使う必要もあり、特別なこだわりがない限りおすすめしない。

Q. 現金はいくらぐらい用意した？

A. マレーシア、特にジョホールバルではクレジットカードが使えないお店がまだ多く、また割り勘する機会も多い。現金は多めに用意しておくほうが心にゆとりを持って過ごせると思う。具体的には、最低限週 1 万円程度はあるといいと思われる。また、滞在中に現金が足りなくなっても、ジョホールバルでの滞在先である **Scholar's Inn** では徒歩圏内に ATM もあってキャッシングが可能だ。裏技として、みんなでご飯を食べた際にクレジットカードでまとめて支払い、みんなから現金を徴収するという方法もある。手数料がかからないのでおすすめである。

Q. ジョホールバルで泊まる **Scholar's Inn** はどんな感じ？

A. ルームサービスが週 1 回しかなかったり、色々な生き物が遊びに来たりはするが、十分快適に過ごせる部屋だと思う。部屋に用意されているものとしては、水、インスタント・コーヒー、マグカップ、コップ、電気ケトル、冷蔵庫、シャンプー、石鹸、タオル、トイレット・ペーパー、箱ティッシュがある。電子レンジやドライヤーはないので注意してほしい。ちなみにシャワーはお湯が出るので、ご安心を。

Q. あったら便利な、意外な持ち物はある？

A. 以下のものがおすすめである。

- ビーチ・サンダル：マレーシアのバスルームはトイレとシャワーが仕切られておらず、床が水浸しになるので気になる人は持参すると良いだろう。
- 紙コップや割り箸など：滞在先にはスポンジや洗剤がないので、使い捨ての食器類があった方が衛生的かもしれない。
- ウェット・ティッシュやアルコール・スプレー：直接手で食べるものもあるので、食事の前などに手を綺麗にしたいときがあると良いだろう。
- ポケット・ティッシュ：トイレット・ペーパーが無いことが多いので多めに持ってくるとうまいと思われる。
- トランプなど：夕食後、寝るまでの時間が暇なこともあるので、カード・ゲームがあるとバディも交えて楽しい時間が過ごせると思う。マレーシアと日本でルールが違うので面白い。
- メッセージ・カード：最終日が近づくにつれ、バディへ感謝の念を伝えたいので、お手紙を書くものがあると素敵だろう。

Q. 服はどのくらい用意すれば良いですか？洗濯はどうしていましたか？

A. 1 週間分はあると楽だと思われる。特に 1 週間目のクアラルンプールやマラッカはあまり洗濯をしやすい環境ではない。ただし、バディに頼めば街中のコインランドリーに連れて行ってもらえると思われる。ジョホールバルでは **Scholar's Inn** にランドリーがあって、洗濯と乾燥を合わせて 10 リンギットでできる。複数人で一緒に洗濯すると安く済む。

Q. バディにあげるお土産は何が喜ばれる？

A. 日本のお菓子は万人受けすると思う。ただし、ムスリムのバディがいる場合は、動物由来の成分など原材料には気をつけてほしい。お菓子以外では、和柄のものや人気アニメのグッズなども日本らしくて喜ばれる。 **Farewell Party** でのギフト交換は相手の性別・宗教などが事前にわからないため、ある程度無難なものの方がいいかもしれない。

BUDDIES INTRODUCTION

文責：本多留梨

3週間私たちをたくさんサポートしてくれた、個性豊かなバディたちをご紹介します。



YanYee

バディを取りまとめるリーダーとして淡々と仕事をこなしていく姿には、まさにクール・ビューティーという言葉がぴったり。絶えず私たちの好みをリサーチして、研修がより良いものになるように尽力してくれた。恋バナになるとテンションが高くなる。

Hui Qin

この研修のサブ・リーダー。マレーシアに降り立ったその時から帰国するまで、私たちが快適に過ごすことができるようにとたくさん考えてくれた。大小問わずあらゆるトラブルにもすぐさま対応してくれて、とっても頼りになる存在。



Jessica

K-POP 大好きなオシャレ・シティガール。日本語もたくさん知っていて、会話の中に日本語の単語を混ぜて話してくれるので、こちらから日本語で話しかけそうになることもしばしば。この研修中、彼女は全員の前で話す機会が多く、毎回圧倒的なプレゼンテーション・スキルを発揮しており脱帽であった。

Ryan

誰に対してもフレンドリーで、この研修の太陽的存在。どこへ行ってもプロ顔負けの観光案内をしてくれた上、流行りのものやスラングなどガイドブックには載っていないこともたくさん教えてくれた。勉強のことになると、それまでの陽気な雰囲気とは一変して本気になる。



Chiaw Hui

愛称は Hui ちゃん。日本語に興味を持ってきており、基本的な「ちゃん/くん」「ただいま/おかえり」「お疲れ様」などに留まらず、最終日には「日本酒」「赤/白ワイン」などもマスターしていた。普段は底抜けに明るいが、お互いの国の社会制度などといった真面目な話になると深い考察を話してくれる知的な人。

Wei Bing

愛称は Mr. Goh。日本語がネイティブ並みである上、バドミントンや音楽、カメラも得意としている。さらに最終日にはグループ・メンバーに手作りのキーホルダーをプレゼントするなど、とっても多才な人。



Adrian

おしゃれなパーマとメガネがトレードマークの Adrian。とある参加者によれば、ショッピング・モールで撮ったプリクラでは一番盛れていたとか。話しかけるといつもまぶしい笑顔を向けてくれる。俳優の宮沢氷魚さんに似ていると筆者の中で話題（なお賛同者はまだいない）。

Shi Han

竹を割ったような性格で、授業や部屋でのゲームではその場をしっかりまとめ上げる、みんなのお姉さんの存在。本人曰く、「79点だとあと1点のところでAを逃すから9という数字は良くない。81点のほうが圧倒的に良い」とのことで、ラッキーナンバーは1らしい。



Jia Yi

腹痛に苦しむ参加者をつきっきりで看病してくれたり、筆者のプレゼンテーションの相談にたくさんのおつてくれたり、誰に対してもとっても優しい人。流行にも敏感なようで、人気の食べ物やインスタ映えスポットをたくさん紹介してくれた。

Lim

Cultural Night や UTM での Icebreaking Session を司会として盛り上げてくれた、明るく爽やかな Lim くん。特に Cultural Night では、歌のおにいさんとしてマレーシアの伝統的な歌を教えてくれた。



Elly

長くてきれいな黒髪のポニーテールがトレードマーク。寡黙と見せかけて、話してみると日本語の「やばい」に相当する“haiyaaa”が口癖でよく笑う。このギャップにやられ Elly のファンとなった参加者は数知れず。

Basirah

一見大人しい性格と思いきや、スマホの写真加工アプリで面白写真を大量生産していたり、“Bas is on the bus！”等数々のバス・ジョーク語録を残したりと、とってもおちゃめな人。日本のアニメ NARUTO が好き。



Edison

スーパーナイスガイこと Edison。プレゼンテーションのグループを引っ張ってくれたり、愛車でキャンパス内を案内してくれたり、包容力があってみんなのお父さんの存在。人狼ゲームでは華麗に全員を欺き、見事 Ryan と多田くん到人狼の嫌疑を向けることに成功した。本人曰く、CK のことは何から何まで知っているらしい。

CK

非常に賢く、とあるバディによると自分でプログラミングを書いてウェブサイトを作っているらしい。前に出るタイプではないが、お土産に UTM の試験の解答用紙をくれるなど、ユーモア満載な一面もある。先述の通り Edison とは固い絆で結ばれている。



Jun Kiat

愛称は JK。Jessica の直属の後輩で、Jessica がプレゼンテーションをする際には息の合ったスライド送りを見せるなど、仕事をきっちりこなす人。ここぞという時には全力でふざけてみんなを笑顔にしてくれた。

Bay

愛称は Mr. Bay。高身長と綺麗に整えられたツーブロックがチャームポイント。優しく上品な人だが、みんなでゲームをするときはしっかり盛り上げてくれる。たまに出現するかわいい笑顔にハマる人多数。



Voon

愛称は Voon ちゃん。とっても明るく華があり、プレゼンテーションではほんの十数秒で完璧な **conclusion** を披露し我々の心を掴んだ。私たち参加者と相部屋になることが多く、忙しい中様々な面で私たちをサポートしてくれた。特徴的なアクセントを真似する人多数。

Jie Xian

からかわれていた他のバディをかばったり、「妻のお金は妻のもの、夫のお金も妻のもの」という考え方に迷わず **Yes** と答えたりするなど、自分よりも人のことを優先できるとっても優しい人。最終プレゼンテーションの日は直前まで陰で練習を重ねており、努力家な一面もある。



編集後記

●新型コロナウイルス感染拡大に収束の兆しが見えてきた今年、3年ぶりの開講となる春季マレーシア研修に参加できたこと、心から嬉しく思います。本研修において、多民族・多宗教社会で生きる人々の文化や生活様式、価値観を実際に肌で感じることができ、それらを自分なりに受容・咀嚼した経験は、非常に刺激的なものとなりました。また本研修は、異文化コミュニケーションにおける自身の課題を発見する体験となったと同時に、今まで関心の薄かった環境問題に目を向ける契機ともなり、自身の将来のキャリア形成や英語学習における新たな一步を踏み出すことに大きな影響を与えてくれました。最後に、本研修に関わり尽力していただいた全ての方へ、この場を借りて深くお礼申し上げます。

(Ayano. S)

●報告書の作成・編集を通して、参加者それぞれの目的や感じたことを知れたと同時に、自分自身の経験を振り返り次に繋げるための準備ができたと思います。マレーシアで感じた空気、出会った人々、目にした風景や建物、耳にした現地の音や声、学んだこと、その全てがここでしか味わえない刺激となり今の私に影響を与えています。参加したメンバー、先生方、バディ、この研修に関わった全ての方に感謝したいです。本当にありがとうございました。(Mahiro. H)

●マレーシアにいた三週間は、初めて見る自然や文化などはどれも新鮮で、楽しい日々でした。また、日本で出会う人たちとは異なるバックグラウンドを持つ人々と交流できる素晴らしい機会でした。僕は研修を通じて、たとえ少しであっても多様な文化・人々に対する理解を広げることができて良かったと思っていますし、そういったことがこの報告書の中で伝わっていたら嬉しいです。最後に、この研修を無事に終えることができたのは、研修にかかわるすべての皆様のおかげです。本当にありがとうございました。(Mizuki. K)